

# 川柳塔

昭和四十一年一月二十五日印刷  
昭和五十四年十二月二十五日印刷  
昭和五十四年七月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷六二一號



日川協加盟

No. 631

十二月号

姉妹品大和錦印



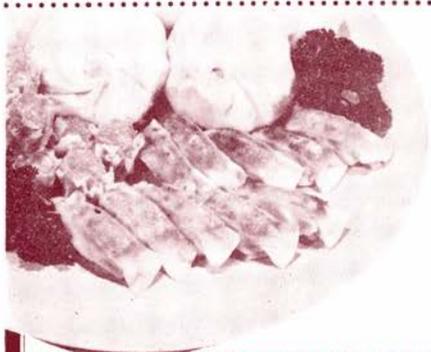
警察庁・警視庁  
全国府県警察  
大阪府警察本部  
講道館・御指定

# 柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社  
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1  
電話(779)1690~2番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ  
豚饅・焼餃子  
しゅうまい ちやあしゅうまん  
焼売・叉焼饅

大阪・なんば



TEL (641) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心齋橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋  
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店  
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア  
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アペノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)

## えらい事

とんでもない事になった。えらい事になった。この言葉はよく聞く。それがなんと吾が身の上になりかかるとは。それこそ、えらい事になったのである。先月号の本誌に西尾某副主幹の名で発表された私の日川協理事長就任のことである。就任の経緯については発表文のとおりであるが、とにかく大任がふりかかって来た私にとっては、えらい事になったの一語につきる。情報が伝わるにつけ、全国

老ぼれよまだ飽きもせず生き続け  
あんたの外におまへんと会長撫でられる  
下積みにこの陽当りは息が切れ  
胸に手をあててぎりぎり確かめる  
廃品にさせてはならぬ廻り椅子

中島生々庵

250余の吟社からは派手に祝電やらお祝辞の手紙を頂き一層私をまごつかせた。しかしよく承ってみると、お気の毒さま、ご苦労さまと慰安のお言葉が多く、中に一つ位、ザマーミろいと老いはれを嘲笑する手紙があつてもよさそうにも思つたが、それはこれからポツポツということらしい。栞氏が言う通り、私だけでなく、川柳塔としてもえらい事である。緊禪一番とはこんなことを言うのだから。

川柳塔十二月号

座右の句

何事も釘付けでなし茜雲

(好郎)

私の句

シンプルに生きて回りと和の鎖

柴田 英壬子

# 川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵・表紙直原玉青

えらい事……………中島生々庵……………(1)

人生の借金払い……………阿部柳太……………(2)

誹風柳多留廿五篇研究……………(二七丁)……………(24)

入江 勇・清 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗  
紀内恒久・鈴木 黄・室山三柳・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

水煙抄……………川村好郎選……………(30)

万句合繁昌……………(川柳太平記⑱)……………(22)

秀句鑑賞……………(同人吟)……………(37)

愛染帖……………不二田一三夫……………(43)

川柳と人形劇と (2) — 随想風に……………橋高薫風選……………(40)

川柳と美……………山村 祐……………(38)

……………戸田古方……………(26)

## 人生の

## 借金払い

阿部 柳太

自分自身でもよいと思つてしてしていたことが  
反対に裏目になって出ることほど悲しいこと  
はありません。

S市議会議員は、つねに住民への奉仕精神  
を忘れない、良心的なご仁でありました。

そのSさんが住んでおられる団地は、夜と  
もなれば、野犬が群れをなして、横行します  
ので、子どもたちはもちろん、婦人たちも安  
心して歩けないので困っておりました。

住民運動もありSさんの積極的な紹介によ  
り、そこで、いよいよ「野犬狩り」の出馬と  
いうことになりました。

しかし犬たちも「野犬狩り」にかかると、  
それこそ大命にかけて抵抗しますので、自動  
車の檻に入れるのに、たいへん苦勞してお  
りました。

このありさまをのんきに腕組みをしてみて  
いられないのが彼のSさんであります。

早速手袋までして「野犬狩り」係員と一緒  
になって、ワンちゃんの足をとり、頭をかか  
えて、懸命にお手伝いをいたしました。

内心これよし、市民奉仕の一端も今日も

路郎と政宗	八木摩太郎	(27)
あすの川柳の指針	東野大八	(28)
白い歯	菊沢小松園	(27)
続・師走の顔	不二田一三夫	(44)
一分間の柳論	辻白溪子	(49)
初歩教室	本田恵二郎	(48)
大萬川柳「便箋」	川村好郎選	(50)
柳界展望		(52)
本社十一月句会	(庸佑・整理)	(54)
各地柳壇(佳句地10選)	谷垣史好選	(59)
	内海幸生選	(46)
	榎本吐来選	(46)
	小西無鬼選	(47)
一路集「ツリー」		
「年越し」		
編集後記	(一三夫・葉子)	(65)



果たせたとよろこんでいたと申します。

ところが、それから数ヶ月後の市議会議員選挙のことです。Sさんに一選挙民から、つぎのような電話がかかってまいりました。  
「Sさん。私はあなたをみそこねておりました。うちの可愛いいポチは、あなたのために野犬にされて生命をなくしました。私はあなたに絶対投票しませんが、よく覚えておいて下さい。ほんとうに可哀相なポチよポチ」と、こちらの返事も待たずに電話が切れてしまいました。

動物慰霊祭が団地で開かれたのは、選挙も終わった十月なかばのことでした。

亡き動物たちに弔辞を読まれる地元市長さんにまじりSさんと私が、この式典のスポンサーとして列席したことは申すまでもありません。

裏目とは人生での借金であります。その借金払いをしたSさんは、さすがだと思いましたが。

借金のままで死ぬとは思ってず 路郎

この句は麻生先生が晩年富田林市の句会へこられたとき、現在の富田林市助役吉田克忠氏(当時公民館主事)にのぞまれ、例のしぶいお顔で書かれた句であります。

そのとき私は、借金の上に死ぬなんて、先生ももう少し良い句をと内心思ったものですが、ところが最近吉田邸へゆき玄関にかかっているこの句をみるたびに、「ムチ」打たれるようなきびしさをこの句から受けております。



中島生々庵選

鳥取県 鈴木村 諷子

焼香をさせてもらえぬ女むすめが居り  
胸張って歩くに誰も見てくれず

お悔みの真に迫って白々し

長寿法なら老らくの恋もせん

有髪の尼僧も今は養老院

犬釘の一つ一つに無駄のなし

富田林市 岩田美代

まだ見ない秋に逢えそな五目ずし

無縁仏ひとを恋うてる姿勢なり

むぞうさに仏になる石積まれてる

相場欄ブラックのコーヒがのぞいてる

ダルマだけ再起は無理だと思ってる

神戸市 仲 どんたく

二十年前を皺から探り合い  
もの言わぬ自販機だから僕は好き

野良猫は追われる訳が分らない

郷愁の祭で買ったわたがしん

この部下に造反漏れる酒の夜

西宮市 島居百酒

真すぐに歩いて片ちびしない靴

久濶が故里の消息運んで来

古時計捻子は巻かずに敬老日

戦友会今年も二人逝く黙禱

一茎一花執念炎える彼岸花

尼崎市 黒川紫香

台風一過さわやかならぬ庭になり

顔出せば溪へはみ出すバスに乗り

地図持って方向音痴がまた迷い

影だけが旅の心を知ってくれ

触れられる美しさを持つ花に咲き

高槻市 若柳潮花

いざごさを聞く補聴器なぞいらぬ

まだ青い蜜柑でもよし仏の日

本妻に嫁けても二号にはなれず

御影堂まで紅、白の萩つづく

ひかされてからジーパンを覆き馴れる

東大阪市 市場 没食子

喜寿すぎて鈍る五感をかこち吞み

死ぬ場所もそろそろ考えねばならず

下手な字で知られその上誤字当て字

旭国引退

限界の相撲博士の背へ拍手

昔の大阪

木津やなんばにかもめがいてたわらべ唄

堺市 高橋 千万子

責任の重さが違う椅子の向き

後悔の言葉に未だウソもあり

しぶ柿も玄関に活け秋の味

老二人柿鈴なりに人を恋う

投票日握手裏切る痛快さ

倉敷市 野田 素身郎

残業のひと息ついて腹が空き

定刻に出席暇だと思われる

定年の秋を愛蔵書と過ごす

テレビにも飽いた微熱の三日間

まだ母に及ばぬ胡瓜きざむ音

味噌汁に働く朝のうたがある

過疎貧し不況乗り切る子に育て

日本の心が過疎の隅に生き

眼帯の中をあの日貨車がい

負けて勝つ心へ枯葉だけたまる

出雲市 原 独仙

晩酌で一合おでん屋で二合

シトシトと秋雨ビールを酒に替え

どちらまでお越しやすのが旅の連れ

赤トンボ追想少年航空兵

虫めがね国の乱れを憤る

倉敷市 水粉 千翁

安らぎの重さを箸に語りかけ

まわり道ふたりのものとしてたのし

生きのびた道にこそ燃ゆ曼珠沙華

秋刀魚焼くむかし話のつづくまま

忙中の閑を照らして月まろし

大阪市 中川 滋雀

掌を合わす時だけ浄土の灯が見える

秋の陽の温みをなでる父母の墓

噴水のいのち溢れてくる白さ

借景のビルを霞に月が盈ち

倉敷市 小幡 里風

岡山県 嘉数 千代香

ため息で美田讓歩の判を押し  
先着の順で貰うて来た粗品

目標へみんなが歩く道が出来  
落書の母の一字が気にかかる

嫌いだと云っていささか気をもたせ

青森市

工藤 甲吉

余つてもただで食わせる米は無し

天高く高く地中に虫もぐる

浪曲で敬老の日をごまかさ

それはそれは地主にいじめられた皺

十二月桂馬の術で逃げ回り

今治市

長野 文庫

竹踏んで見たり縄とびして見たり

次の番気付かれぬよう深呼吸

思う壺高鳴る胸の風が風ぎ

温室で育ち少年すぐむくれ

声がわりしたが漫画は抜け出さず

川西市

戸田 古方

業尽きぬさかいに生きているねやろ

夏安居の円座は虫を敷いていた

時間待ちがいい休憩ですわいな

お辞儀されわからんままでお辞儀する

QアンドAこのごろやっつわかり出し

平田市

久家 代仕男

ロボットの妻なり姑とまるく居る

干草を嗅いで安らぐ仔づれ馬

絶交の友ふり向けばふりかえり

ひとむかし前は案山子のコンクール

落ち着けと拳が膝を押し沈め

宝塚市

傍島 静馬

不甲斐ない自分に気付いた八ツ当り

お伺いするつもりでしたと口まかせ

ぼろ口へ犬と猿とが手を握り

どたん場に正体見せた猫かぶり

身の上話カモのふりして聞いてやり

倉敷市

稲田 豊作

顔洗うそばから金の要る話

空財布平気で外出する若さ

亡き母の鏡に写す晴れ姿

露命とや せめて一善考える

事情好転今宵の星空綺麗だな

西宮市

藤村 女

水谷八重子逝く

秋風に散り急ぎ逝く白萩の女

萩白く咲いて女がひとり住む

家の前だけで泣き虫気が強い

一日が始まる母の仏間の灯

不景気な顔が売ってる宝くじ

寝屋川市

江口 度

どんぐりの背くらべだからいろは順

出世したのはみんな愚妻のお友達  
婚約のレットル貼られ檻の中

玉手箱あけて恩師に逢いにゆく

曼珠沙華冥土の亡父に逢いにゆく

和歌山市 津田与史

今日はもう昨日ではない朝を掃く

行楽の秋を犠牲に闘病記

予定にない道がある時歩かされ

老妻と二人で今日も描く漫画

公園で無職同士が今日も会い

美祿市 安平次 弘道

思い出もあつさり捨てる使い捨て

学のあるとこを見せたい辞書を繰る

歯車のリズムが狂う妻が病み

生え抜きのやる気がしほむ天下り

他人からみればつまらぬ意地を張り

倉吉市 奥谷弘朗

年金の枠でいたわり合つて生き

すけずけと言うから真実味が解り

泣き面に蜂というのが解りだし

びつたりと予想が当たる初対面

まじないに傘もつて出る空模様

大阪市 本多柳志

補聴器を外して嘘を聞き流し

励ましてやがては貶す舌をもち

司会者にされて物怖じせぬ演技  
メシライスゴハンオマンマ子沢山

金婚近し

五十年すがりつづけた細い腕

倉敷市 藤原桜山

一期一会そんな情の風媒花

煩惱の果てのはてかもいわし雲

今だから笑つて話せる裏話

女心そんな言葉で甘えさせ

爽やかな汗は知らない評論家

等岡市 木山遠二

もえろよと五体の何処かまだ点り

緊禪一番と云うこともある八十路

振向けば妻も八十路へ向いて来る

井戸へいは廃語五億は現代語

寂しさよ稚名も八重子も老衰死

島根県 錦織文子

信号機の動きへ人間裁かれる

よく動く妻は邪心などは無く

エレジーとなつて民謡うけつがれ

水中花土の慈愛に触れもせて

山肌の瘦せてわびしい山の私語

島根県 榊原秀子

ほけるなどアドバイスしてくる娘の電話

バスの窓こころ久々ゆする景

ささやかな庭へ咲かせた花に酔う  
裏切りじやなくただ筋通したまでのこと  
体育会孫へ応援出来ぬ距離

竹原市 小島 蘭 幸

子の視野のどこかにいつも妻がいる  
這い這いの標的となる妻の掌よ  
夫婦してたったひとりの子に疲れ  
一枚のハガキに秋が盛ってある  
寝たきりも嫁には涙など見せぬ

松江市 柳 楽 鶴 丸

長いものに巻かれたら幸せになるだろうか  
ロマンスも色気も活きたい華道展  
人の通らぬ道だから歩いて見る  
人間のために無精卵うみつづけ  
帚のあとつけて掃除がすみました

岸和田市 高橋 操 子

七十だから紅もさし手も染める  
七十のがんご自分ももてあまし  
七十のおしゃれ楽しいキモノ買う  
七十を大事がられる淋しさよ  
どの部屋もあかりをつけて古稀祝う

大阪市 河野 君 子

カレンダーにメモして母のいくさかな  
青空へなんとなく炊く栗おこわ  
選挙戦哀しい漫画見るおもい

ウォーミングアップばかりの一生持ち歩く  
かーるいショックで衣替えする秋の冷え

大阪市 金井 文 秋

中途半端な心で馬鹿になりきれぬ  
暇あれば眠り持病にさからわず  
思考力当分駄目な風邪をひき  
不協和音続き夫婦に危機が来る  
指導する身に手ごろの難かしさ

島根県 堀 江 正 朗

落葉ひらり僕に頼ずりしていった  
しびれても正座崩さぬ老いの意地  
現実にかえれば見えぬ目が恐い  
トネルの音を数えて汽車の旅  
少しずつ想い出すまま旅話

島根県 堀 江 芳 子

よそゆきの顔で集る祝い客  
薬包紙カサカサ秋の音で鳴り  
馴れっこになっても感謝して夫婦  
ライバルとしての夫婦に垣がない  
お団子が嬉しい夫と月見かな

兵庫県 大 江 秋 月

食卓の下を愛孫這いまわり  
出勤を孫と犬とに見送られ  
栄転も左遷も同じ汽車で発つ  
ローカル線毎日座る指定席

菊一輪生けて娘の部屋にする

八尾市

高橋夕花

わが歩巾変えることなき坂の道

夢捨てて解放感の素晴らしさ

中年の坂にも光る星がある

明日のあることを教えて夕日炎ゆ

待針ももう引き返すこと出来ぬ

富田林市

板尾岳人

十二月借金返えずと山は雪

風が吹く峰から聞える父の声

山の絵を画くと喜ぶ母である

近鉄が負けても山に雪がある

樹齡千年山の空気は鈴の中

大阪市

大坂形水

場割りするてき屋の揉めの政治劇

出る幕でないのが出て来てこじらせる

総裁にいつそ卑弥呼を担いで

晩に出ることも少く疎うなる

一日を商売忘れにゴルフ場

大阪市

不二田 一三夫

わが灰も撒けば桜が咲くだろうか

神さん詣りに三日も四日も家をあげ

そういえば松茸うどん店にない

友引をデート日にする職に生き

Wヤング・中田治雄さん自殺

いのち取る金とは知らず借り歩るき

竹原市

山内静水

子の決めた結婚従うほかはなし

信心は聴聞なりと解りかけ

ひとりになったらと妻の枕を胸へあて

目に迫る奥さん糸屑とつてくれ

和歌山市

野村 太茂津

揺り篋を横から押しにくる鬚り

鈍感に見せてペン先斜に構え

後悔の夜更けストーブ燃え続け

海昏れて意地を通した身を咎め

島根県

藤井明朗

仕事を追うて口笛の出る秋の道

桜土手老いの憩いの散歩道

定退のこれから四季の庭が待つ

運命にさからい片道選って行く

兵庫県

遠山可住

灯をとす妻へ後事は托し切り

ちよつと貸してみいやと糸が通らない

花道に消えるまである背なの芸

五百羅漢ここから秋が深くなる

米子市

林 瑞枝

愚痴へ戸をたてて感謝の灯を点す

馬鹿になる術知らないで職を変え

百数えあとは情性で登る坂

甦る青春陽に干す蛇の目傘

松江市 中川 晃 男

喪服の似合う女で今日も不倖せ

面倒を見すぎてとんだ誤解され

SLの煙は公害と言わず

孫の愚痴こぼす目元が流れそう

桜井市 岩本 雀踊子

祭りにも帰らぬ息子の筆無精

カラカラと笑えぬ男の失語症

肩書のとれた父ならしたしめる

何もかも仕舞える母の小さい胸

岡山市 川端 柳子

寶石がひとりよがりの夢を売る

ぬきうちにしあわせだってやってくる

言い足りぬとこを補うひとり言

奴胤どこまで空はあるのやら

泉佐野市 阿萬 萬 的

湯のけむりあのあたりから日が暮れる

商売下新宿の主人は話好き

神明造りへ直線的な木の香り

寺々に落葉のけむり嵯峨の秋

倉敷市 田垣 方 大

敬老会素焼のような人ばかり

器用さがないから上役目をかける

お出かけの服装火の車とは見えす

過疎の村秋の香りがきてくれた

鳥取市 河村 日 満

オクターブ落として父の唄が出る

日本を護る眼にする飛行雲

子を叱る威厳が父にまだ残り

ふるさとの山真向いにビルが建ち

今治市 月原 宵 明

世渡りにはつきりさせぬ旗印

道筋の時計にされて平社員

婦人服のマネキンどれも研ナオコ

敗北の自民へ秋は釣瓶落ち

松江市 小林 孤呂二

漫画家の正義の剣は尖りすぎ

愛着を風呂敷にもち老いてゆく

何かあるたびに役人は襟ただす

働くとしても職の口釣合わず

大阪市 江城 修 史

わが道を行く子が大きく見える日よ

恩師の声を伝えて受話器のあたたかし

愚痴ひとつ持ち帰る夜の胃の疲れ

美しく老いて老醜さらすまい

島根県 西村 早 苗

視線びつたりどこかで会ったよな記憶

老夫婦同じいびきで飽きもせず

寡婦と子の生活が白い眼に耐えて

勝つことが淋しい今日は負けてやる

堺市 藤井 一二三

うす味の夫婦でいつか老いている  
彼岸花に負けぬわたしの火を探す  
おんな四十ソブラノで欠伸する  
ゆるす気の橋を広げて待っている

八尾市 香川 酔々

焼き茄子の筋の一つに秋がある

公団に儲け口あり闇賞与

人並みに名月だったとほめてみる

チ・ボンでお目めが紅いうさぎ小屋

箕岡市 松本 忠三

乗り上げた船に舵とる人も無く

留守番の時に限って集金人

後足で砂をかけるもご時世か

心眼が白と黒とを選び分ける

橿原市 岩井 本蔭棒

訓練のゆとりで響く非常ベル  
飾り気の無いのが一番社を思い  
同じ物食うたが僕は異常なし  
シベリヤで眺めた月と同じ月

倉敷市 藤井 春日

子育てに父母の歯車噛み合わず

何もかも高うてへそくり出来ません

お立ち酒父サはそつと涙拭き

縁談も纏まり素直な娘に戻り

大阪市 天正 千梢

体温の入った料理でもてなされ  
他人さまに言える悩みのたかがしれ  
五百羅漢父上さがし母さがし  
頼杖をついてる羅漢の胸のうち

西宮市 若林 草右

手袋の白さが惜しいこのマイク

達磨の目カメラなかないれさせず

今日からはそり返ります達磨の目

台風へつぎはぎ瓦意地を見せ

大阪市 山川 阿茶

真実は散らさずに欲し木枯しよ

夫婦愛親子の味もバタ臭し

制服の方が見られる女の子

人生は自作自演とはゆかず

岡山市 直原 七面山

逢曳へ磨く肌  
過去隠す濃化粧  
主避けて飛ぶ噂  
決め球は矢張り金

藤井寺市 児島 与呂志

生甲斐の限り私に愛がある

過去のミス忘れて黙々老い生きる

投げられず済んだ小石が汗ばんで

自画像の妻まっ白な割烹着

新宮市

大矢十郎

どの嘘にしようか軽い票を持ち

危きを避ける君子にも病魔

宮仕えの父を手本に事業欲

酒呑みの最初の嘘はもう飲めぬ

兵庫県

北山越山

ほころびを縫う針だけで糸がない

松茸の不作を詫びた栗の籠

平凡な丸さが包む夕餉時

それぞれに癖のあるベル子が帰る

大阪市

柳原静香

茜雲老いには老いの夢があり

物思い料理の手順また狂い

水谷八重子さん逝く

大輪のぼたん崩れし淋しさよ

一本の野菊に託す願いごと

大阪市

神夏磯道子

塗りかえぬりかえ夢を遠く持つ

悪評のままに引けない風へ佇つ

一番星あしたの返事待ち遠し

栄えの日のあなたへ添える幸うれし

竹原市

三宅不朽

母の知恵ありがたがられ煙むがられ

山の精吸いとるごとく飲む清水

コスモスのあれでしたたかですと風

千手観音どの掌も空し孤老の死

松江市 恒松町紅

肩書のつかぬ名刺で悩み帳

素人の菜園鋤に侮られ

飼い馴れた自慢もみせて連れ歩き

背中もう大人になったユニホーム

米子市 八木千代

全快に薬残つて邪魔がられ

ワイン深く澄んで理性がかすみ出し

内職の掌が百円の汗を知り

限界の壁へせめての錆を拭く

河内長野市 井上喜醉

西国札所横尾山(二句)

頂上はさすが御札所香が匂い

信頼が強い味方になつてくれ

銭のいる話へ黙って笑うだけ

隠しても恋を知ってるカウンター

大阪市

本間満津子

手ざわりであなたの服にある追憶

師の御手に縫れば少女になる私

部屋ごとのテレビ家族を引き離し

云うてから口止めをする浅はかさ

鳥取市

小林由多香

たわいないうわさ小耳に走り抜け

ハイカラな案山子に守られ稲熟れる  
急ブレーキ子供笑つてとんで逃げ  
風雪に耐え抜き虫に枯らされる

松原市 北野久子

幸せはしんし張る背に秋盛り  
終電車人相悪い人と降り

誘惑へふつと乗りたい月明り

まだ翔べる若さへ孫をあてがわれ

大阪市 川口弘生

叱られる空気はわかる猫のヒゲ  
子育てを宿命とみて鳥渡る

養なわねばならぬ妻子をもつネクタイ

出世頭はどれかいなあと写真帖

鳥取県 森田布堂

世渡りの上手な嘘が見抜けない  
保釈金積んだと思や立候補

運命線の切れ目が癌になるのかな

生き甲斐はこれだと銚子振るも秋

呉市 横田英詩

五十五に勇退迫る十二月  
疑問符が見事消せるかインク消し

竹割った気性が妻に苦勞かけ

運不運何故サイコロのせいにする

羽曳野市 塩満敏

傷心へ星の王子が降りてくる

松坂の牛はビールを飲みあきる  
人間になつたか孫は歩き出し  
孫の足そつと大地へつけてやり

泉大津市 村上春巳

ゲンコツの固さ信じる子の闘志

子雀にまいた小米へ鳩が来て

友情の梨が届いて秋を知る

大戦記五十路にさわぐ血が残り

鳥取市 大塚豊生

酔えばすぐ明治の頃をなつかしみ

まごころを捧げつくしてお人好し

本当のがまん素知らぬ顔でいる

逆境へ逆うルージユ強く引き  
宇部市 平田実男

献血へ強制されたのも混じり

盆栽のように行けばと子を思う

目の位置で嘘をついてるのが解り

袖の下火葬場にまでつきまとい

柳井市 弘津柳慶

遺骨もう過去の汚れを流し去り

二次会へ誘う相手を物色し

風まともただ黙々と塾通い

子育てを終えて夫婦の明日を生き

和歌山市 内芝としよ

極楽へ続く善意の道を行く

他人の花赤くて道を踏みはずす  
それぞれの希望へ弾む朝の膳  
乳房もう貴男任せと牛の顔

大阪市 室 谷 徹 舟

利己主義のかたまりラッシュのホーム理め  
達筆で来たので返事出しそびれ  
胸一杯紅葉を吸って満ちたりる  
賽銭を銭形平次型で投げ

竹原市 時 広 一 路

色幾つ重ねても出ぬ海の青  
人形と人形それぞれ故郷自慢  
枯草の道は一人で歩くもの  
庭の隅小さな冬を過す菊

大田市 藤 田 軒 太 楼

実をつけて心おきなく花は散る  
薄れ行く記憶霧笛に似て哀れ  
義理でする化粧鏡にのってこず  
客筋が自慢の女将で太っ腹

米子市 小 西 雄 々

格好よく翔べずアキレス腱を切り  
獲物より撒き餌の海老が高くつき  
天草も佐渡も知らぬにグワム島  
経文も聖書も読んでまだ迷い

島根県 小 砂 白 汀

原点へ旅情は人を還らしむ

忙しくなると詠がまぎれこみ  
人間の芯をむき出すまで飲ませ  
持って生まれた性分などと一徹な

ホノルル市 前 山 北 海

人間を進む電化が無能化し  
被爆者の叫び悲痛に胸を刺し  
君が代を明治の声で歌い上げ  
ボロボロの心夕焼に励まされ

枚方市 稲 葉 星 斗

朝顔のだんだん減って残暑すぎ  
敬老会カボチャの味で満足し  
弱りたる蚊を追いやればもの悲し  
旧株も衰え見せず今年菊

姫路市 梅 谿 庵 不 醉

働ける生甲斐楽し喜寿近し  
泣き笑い古々米となる稲の出来  
握手して勝った負けたは時の運  
喜の祝俺もそろそろ下り坂

鳥取市 両 川 洋 々

五当四落そんな選挙を恐く聞く  
断絶の政治へ公約冷えている  
選挙浄化せせら笑って金が舞い  
天皇の旅へきれいな街つづく

鳥取県 清 水 一 保

喜んでよいのか豊作まだ迷い

童心に帰る夕に歌がない  
神のみが知る運命に挑戦し  
老農の背腰を秋風撫でて過ぎ

和歌山市

浦野和子

伴せは空気のような友と居て  
血統書付でひ弱な子が育ち  
炎えた日の記憶が生きる証しとも  
洒落た服洒落た会話で行く舗道

西宮市

杉浦婦美子

足枷を自分ではめたノイローゼ  
気紛れな秋に合した旅支度  
離婚もフアッション化して週刊誌  
さわやかさ盗みたいよな秋の色

諫早市

原田明春

皆様が神様ですと選挙戦  
宮仕え上司の無理へ無言劇  
アルバイト厳しい世相を娘は悟り  
神様が聞かない無理を七夕へ

鳥取市

岸本無人

名案に他人の金をあてにする  
飲み足らぬ夜を埋火燃して寝る  
愛が冷え夫婦互いに逆らわず  
お隣の窓から貧乏覗かれる

和歌山市

福本英子

止り木の親子へおでんの温い湯気

ピンボケが救うてくれた美人です  
看病をほうり出したい日のあせり  
宮仕え恋しい程の退屈さ

三重県

坪田冬花

沈黙の怖さ一人減り二人減り  
今日からは定年の首もてあます  
親娘かと云われて妻ですとも云えず  
腹立ててあとで本当のなぞがとけ

寝屋川市

宮尾あいき

秋晴れをもつたたくも風邪で寝る  
書棚の句集が読書の夜にする  
飛び出した私に孤独の影法師

京都市

松川杜的

アドリブへその才能を認められ  
鈍行の旅よし車窓へ蝶が来る  
お互の過信へ相談まとまらず

松原市

谷垣史好

手榴弾のような男を部下に持ち  
一億みんな肩に力が入り過ぎ  
背水の陣が身内から崩れ

米子市

石垣花子

馬鹿になる知恵の無いのが職を変え  
改築の名刺三流ホテルめき  
省エネへ古自転車のはこり拭き

倉敷市

斎藤通風

行き詰りここは心中禁止場所  
風格を白髪になって見出され  
板前の夜食は横町お好みや

京都市

都倉求芽

影の奴伸び縮みして先き回り  
守衛より黒い社長のゴルフ焼け  
素っ裸で縛られマネキン立つ荷台

岡山市

時末一灯

馬鹿になり通せば相手が馬鹿に見え  
山の宿出れば霧だけついてくる  
短命な愛を民話が語りつき

東大阪市

竹中綾女

伊那節を聞きつつ天竜川下る  
物干へ上って明月確かめる  
明月は亡き夫の事惚ばせる

松江市

梅本登美也

山で子を亡くした母が山憎む  
吊りパンが頼っべを叩く運動会  
信仰のうちわ太鼓が破れそう

貝塚市

行天千代

秋深し靴音までが冴えてくる  
秋蒔きの種へひそかに期待する  
そろいの浴衣着て地車曳かぬ子よ

島根県

飯塚虎秋

山の子を誘う日の出は峠から

もう秋か月の丸さと虫の声  
失業の門でラッパを吹く候補

名古屋市

大林曲ん手

孫の手が届かぬ痒いところがある  
鰻にはなれぬどじょうの哀しまず  
落選のグルマは足が欲しくなり

大阪市

河井庸佑

五十坂まだまだ若い気で登る  
落ちこぼれ人それぞれに生きている  
天分を知って他人をうらやまず

大阪市

津守柳伸

つかの間の逢瀬を喧嘩した眼覚め  
孤独さを笑うネズミがいてくれる  
人並みに涙は持っているものを

和泉市

西岡洛醉

嬉しい日靴から唄が鳴りそう  
笑い声精一つばいの倅よ  
妻の手の温もりがある老いの坂

伊丹市

檜谷寿馬

引越へナポレオンだけ抱いてゆく  
瓶までが媚態で誘う洋酒棚  
瓶詰の鬱憤抑えているコルク

大阪市

欄蘭

夏の名残り背中に残し秋立ちぬ  
憶病で献血車の前走り抜け

雲見ればあてない旅に出たくなり

岸和田市

古野 ひで

仙台市

川村 映輝

台風へ除けて通れと鬼瓦

清貧が誘いの水へ横を向き

老いひとり嬉しい栗飯届けられ

玉野市

小谷 仙山

踏み固めた道にも有った落し穴

電話口きれいな声で断わられ

台風が来ると言うのに菊の花

和歌山市

垂井 千寿子

逃げ腰の女 勘定間違えず

信念は曲げず横道蟹が行く

マイペース守って虹を遠く見る

寝屋川市

柴田 英千子

匂う字が不遜な愛を書いている

コスモスが母のつよさで褒められる

こころ洗う一刻静かな新能

姫路市

大原 葉香

無事な勤め祈るが如く光る靴

合掌の出来る倅せ積み重ね

台風一過天にも二つの顔があり

東広島市

高橋 鬼焼

さようなら明日の言葉をためておく

風も秋風車の色を塗りかえる

人妻の秋をぬすんで縫い急ぐ

よれよれの札いとおしくしわ延ばす

汚職なら部課長並みの係長

総選挙終って危機感迫つて来

和歌山市

西山 幸

痛み持つ石のきれいな丸さかな

八方の闇をみつめる眼鏡拭く

花びらの掟は風に背けない

大東市

土岐 トク子

目の梁をとって善意の人が見え

風がなるふるさとの墓石気にかかり

美しい言葉のこして母は逝き

唐津市

新岡 回天子

遺産もう少し有る筈愚痴る末娘

寝たきりのあんたでしかないそれで良い

伝言板見て呉れたのか便りない

下関市

国弘 半休門

方言も混ぜてガイドそつががない

木曾中山道の旅

木曾駒で御岳山を遙拝す

復元の賛(にえ)川番所は下に在り

和歌山市

松原 寿子

友人のこころで温い鈴を呉れ

朱線引く其処に逢いたい距離がある

垂直に受話器を置きぬ指の炎え

藤井寺市 中原 比呂志

母親をからかい始めた中学生  
来年へ淡い期待を残しとく

クレオンを全部使つて秋を描く

鳥取県 林 露 杖

明月に吾がデスマスク写し見ん

老猫の自信に満ちた眼と出合い

半四郎舞うは小梅の黒田節

岸和田市 福浦 勝 晴

手術台畳一帖いまさらに

喚めいても所詮は犬の遠吠えか

片言で這う家中の人気者

大阪市 藤田 頂留子

のぞかせぬ心を伏せた甘い声

なれつこの恐さ注意も上の空

惜しいこと此処なら五円安かつた

京都市 山本 規不風

行き先を書いて安心させて置く

さりげなく妻は会社の事に触れ

ふと合わず視線の厚意貯めて置く

東大阪市 崎山 美子

ライバルの動きをよめぬ日のあせり

物干にゆれてる影に秋の色

ハイヒール少女を女にかえる靴

兵庫県 辻 文平

デッサンに嫁 嫁なりの彩を入れ

律義さがおくに詭りを捨てさせぬ

写経する我を忘れて蚊を叩く

岸和田市 狭間 希久志

花道を避けた花見に恋めばえ

考えて考え抜いてはずれ券

宝石が妻を駄駄っ子にする強さ

羽曳野市 榎本 吐 来

一徹を継いだ息子へする思案

芽の出ないままの手相を自慢する

小さい夢そつと抱いてる手内職

東大阪市 齋藤 三十四

民謡に郷土の歴史生かされる

五合目からの富士はデコレーションケーキ

大写しスターの目尻にある小皺

竹原市 森井 菁 居

哀しさと虚しさ拾う秋の磯

孤立無援しよぼんと小舟も浮いている

飲める口もつて果報な男坂

大阪市 神田 秀 峰

暴力へ小さな勇氣束になり

秋晴れへ旅の予定を追加する

長いもの巻かれる主義で媚に生き

鳥取県 川崎 秋 女

S Lのマニアで埋まる津和野線

孫の夢娘の夢まだまだ死ねないぞ  
忘れてた疼きを友が提げて来た

米子市

増田竹馬

謎めいた言葉の裏に読む決意

レントゲン百葉の長をたしなめる

冬仕度ボチボチかかれと赤い羽根

橋本市

森脇善太

凡人の知恵昏かみしめる

一日の始動は蛇口から響く

子供には踏まさぬ道と思いつつ

米子市

佐伯越子

仙人の境地になって百を生き

出稼ぎの父と帰った大財布

謎めいた尼僧の過去が気にかかり

和歌山市

若宮武雄

人毎に嫁の手編という自慢

這うてでも登りつめた老いの坂

語らいが月へ尽きない回り道

島根県

梅みどり

懸命に生きる遺産を子にしめす

柿一つ大樹にわびし霜しぐれ

一季節めぐれば老いの風車

島根県

谷岡芳枝

しつとりと濡れた石庭私語と私語

従いて行く道でも地図は持っている

正倉院歴史の汗を重く干す

香川県

岡田拳法

ロッキード暴露 日本放棄の布石かも

軍事大国脅し無理じいする臭い

平和呆け日本は脅しやすい国

竹原市

古谷節夫

エンストもちよこちよこ起こす四十坂

ふりむけば風が足跡消しそうで

天の声国民の声選挙済む

岡山市

出原敬一

良い後妻らしく子の掌に紙幣の皺

聞合わせに来た老い旧家と知れる所作

胃腸科で同じ思いの友と会い

大阪市

黒田真砂

倅は猪口一杯でほろと酔い

握手した温もり大きな期待かけ

騒音規制選挙カーが先ず破り

和歌山市

吉野富子

息子の迷を解けば別居の下心

倒産へ社長捨て身となる誠意

口紅の好きな妻なり古稀近し

七尾市

松高秀峰

唇を冷たく結ぶ子の不満

スランプを抜きたいあせり勇み足

帰る気になりかけた頃良い話

すぐそこが遠い田舎の道標

札束を鳴らせば心の友も逃げ

孫上げる力が欲しい車いす

寝転んで明日を考えてはならぬ

孫膝にブランコ揺れて澄む心

秋の陽によちよち孫と僕の影

思うツボ農民とつくに田を呪い

死期を知る悠々たり赤トンボ

四〇キロどん底にして夏を越し

大器晩成と云う算木を信じ度い

光るかもと瓦礫を磨く愚か者

天地裂けても白は白黒は黒

秋まつり故郷の匂う酒に酔い

庭石へ思い出濡れて風渡る

ワンマンへある日のぞいた孤独感

赤鬼の牙かとおもう唐からし

枕木の柵夏草に背を越され

口縫うてやりたい女と乗り合わせ

大阪市 横地雅風

守口市 野呂右近

兵庫県 河原みのる

大阪市 西川誓二

島根県 大森孝華

大和郡山市 森田カズエ

出雲市 高橋可保留

子供の手もう飛べそうもないトンボ  
嬌声へ吊橋いよいよ揺れ始め  
つかまつた無念をものがくトンボの眼

秋雨にどうにか耐える萩の花  
秋風へ何をささやく赤い羽根  
海と空一つになって丸く見る

戸をたたく風が孤独の夜にさせ  
正直にあやまる子供の瞳がきれい  
悪企みして善人の顔でくる

ざわめきが野次馬根性かりたてる  
増えてくる孫へまごまごして居れぬ  
買って来た花で花壇は飾れます

無駄にせず我が人生の廻り道  
何気ない癖を孫から指摘され  
触れ合いを生き甲斐にして趣味多彩

目じるしのほくろで双子の名をおぼえ  
見送る子の笑顔を胸に朝の靴  
思い出をひろいに一人行く浜辺

名月を浮かせはにかむ庭の池

大阪市 北 勝美

鳥取市 有田とし江

和歌山市 坂口公子

鳥取県 金川満春

岸和田市 清野こう

本 田 恵二朗

力とも鏡ともなり無二の友  
親と子の絆点線で繋ぎ合い  
趣味仲間恥かきおうて楽しそう  
金婚の霞む記憶を探し合い

尼 緑之助

お題目均一バーゲンは声で勝つ  
むなしさよ汚染の泡を見た選挙  
政治色団地の女塗り替える  
多過ぎるニュースも避けて通れない  
芸のない嫁ハミンクの台所

正 本 水 客

十二時が鳴って時計もホツとする  
忙しさばかりを男追うている  
振り向いて働き蜂がなつかしい  
夫婦のあいだに風すこしあってよし  
三遊亭円生羽織を脱いたままになり

菊 沢 小松園

人並に遺言状は書いてある  
ひとりになればひとりになったという悩み  
三猿に落着く齡がそうさせる  
触れ合わぬ指なら敢て近づくな  
必要のないのがいつち先にくる

伊 藤 茶 仏

生き仏さまが大谷派を捨てて  
仏間まで金木犀の風匂う  
金権の政治奈落の底を這う

絶壁に度胸を試す冬の海  
石刻む観音さまにある色気

愛想に訊いた手術のくどいこと  
地下鉄の出口違ふたひとり言  
喫茶店喪の腕章をはずしあう  
筆蹟の句碑の深さを撫でる秋  
白樺の並木をぬうて恋佳境

われとわが身を慰むる菊の白  
菊の日の白い炎に焼かれける  
朱の菊あつてもよしと思うなり  
抜け毛より佗しく菊は散るものか  
幕の天地に野菊鱗雲

橘 高 薫 風

西 尾 栞

まだ生きていた寿命とは恐れ入り  
それぞれの運を背負って人歩く  
ポケットにはこりがたまる十二月  
冗談をうっかり言えぬ人と知る  
暗算でする利子だからたかが知れ

浜 田 久米雄

魚るまい振り返えるまい喜寿の坂  
切り身鮭そんな喜寿なり誕生日  
干潮へ老いの心を置いてみる  
まさかとももしやと思う封を切る  
まだ何を主張したいか残り花

川 村 好 郎

川柳太平記 (19)

万句合纂昌

東野大八

柄井川柳が前句付点者としてか、それとも雑俳畑の選者としてか、いずれにしても公認点者として立机した明確な資料はない。

たいこもち的集団と化した江戸座や、蕉風の衣鉢を継ぐ正統雪門社中と自称する金儲け主義として大企業化した蓼太らに、愛想をつかしたことはたしかな柄井川柳だが、要するに自然発生的に点者資格を獲得したのは、万句合の刊行と、その卓抜な選句眼にあることだけは明確である。

正式に立机していないがために「無名庵」が彼の肩書についたのかもしれないが、諸川柳人机辺で親しい「川柳雑俳集」にも、宝暦七丑年（一七五七）に「此頃より川柳点者として声名あり」としか記されていない。

とにかく柄井川柳が、いわゆる川柳点として人並の宗匠として立机同様の名声と資格を得たのは「万句合」の刊行が転機である。宝暦七年で彼歳四〇、この時が柄井川柳の事実上立机した時期とみてよろしかろう。

では「万句合」とは何か。「広辞苑」には「まんくあわせ（万句合）月並万句合の略で前句付の一つ。選者が前句の刷物を配布して付句を募集し、勝句を半紙五、六枚に暦のような体裁に印刷して配布したもの。宝暦から寛政ごろまで行われた。初代川柳のものは「柳樽」の底本。暦掲。

とある。この記述は、喜多村信節の「嬉笑笠覽」（文政一三年自序）に拠ったものであろう。即ち巻三にこうある。

「前句付判者多き中に、宝暦の末、明和の初頃机鳥、露丸、川柳等大に行われ、月次万句合として集る句数、およそ一万六、七千句、勝句四百四、五十半紙、五、六枚に暦の如く細字に印刷して配る。「柳樽」という草紙は川柳その内より、をかきき句を抜書て上木したるなる。今に至るまで相続て出づ。

この二つが要領よく「万句合」なるものの性格を述べている。

万句合という名称がいつから起ったかについては、元禄十六年正月刊の前句・笠付集「たから船」（江戸・万屋清兵衛板）に「万句寄」とあるのが最も古く、また正徳二年刊の「つづら笠（同）の巻頭には「前句笠付万句合勝」と記してある。

俳諧に於ては万句興行が宗匠たる地位を得る一つの条件であったが、前句付にあっては応募句の多寡に依りて千句合、万句合と称したもののようである。

笠付を發明したのは京都雲鼓で、彼は柄井川柳が生誕する前年か、万句合をすでに開始しており、宝暦年間に入ると同時にこの呼称を用いている。雲鼓が既述のように京都で全国集句をはじめたころには、すでに二十人の前句付点者がいたわけで、月一万句の集句

はずでに行われていた。

柄井川柳の万句合は、宝曆七年（一七五七）八月二十五日から寛政元年（一七八九）九月二十五日まで、毎年八月（宝曆九年、安永二年、同七年に限り七月）から十二月までの五カ月間、毎月五日の日に発行した。

—宝曆七巳との頃より、川叟初て万句合の催しありしより、年々日々のほんえい言葉につくしかたく、一会の寄高、二万五千六百余頁に及びしは、実に稀代の判者というべし—  
家内喜多留三十篇（文化元年板）にある。

この体裁は宝曆曆（ほうれきこよみ）に模し、美濃半紙で一枚乃至十枚つづりて、俗に「こよみ刷り」といわれた。この万句合は、発行日を明らかにするため、曆風に天満宮梅桜松仁義礼智信鶴亀叶などのうち一字をとって相印とした。

もっとも右の柳樽30篇で大いに集句率を偉張つてみても、宝曆七年の初開きの集句は、わずかに二〇七の寄句でしかなかった。この柄井万句合の選者は、南華坊、如露、黛山、取月、川柳らが、日によって担当を替えている。しかし、結局、この万句合スタートの年の年間集句は一万七千三百三十一句で、番勝負五百十一句、年刊句集としてなら万句合の呼称もおかしくはなかつたわけである。

京都は雲鼓はじめ二十人の点者を有し、全国規模で取引所を設けて、大きなネットワークを組み、二十年近い年期をかけているのにくらべ、江戸方の柄井川柳は何さま開店？早々のこともあり、その集句PRに大いに努力奮励したことはない。

かわらばんによる宣伝ビラを盛んに撒いたらしい。主に地方向けに次のものがあつた。これがのちの柳樽出版に組み入れられた。

#### 万句合口演

各々様お情を以て年々前句繁昌仕忝合奉存候 又々当年も興行仕候 先達而神に誓ひ申上候通諸事偽がましき儀一切不仕正直を専一と仕候間景物等も随而入念差出候間ひとへに御憐愍御ひいきを以御出請奉頓候  
万句合 料十六穴 川柳評  
追而申上置候題の儀 その当日々々相用一切おくりには不仕候  
未八月五日 祝ひ社すれく

はすかしい事く  
にぎやかな事く  
はじめこそすれく

おひたてて  
右の外 追い題なし（以下十二月十五日題略）

一、私事青二才のもの故古句存在不申候

一、御句類句にて突き合候御句御座候とも御趣向宜しく御句の方勝負に差出申候  
依之類句は一切構不申候 御同句は出不申候

一、五文字もじり其外段々句長点仕候  
御巻遣可被下候 以上

安永四年乙未中秋

これによると一年中の前句（課題）を一度に出題しているが、その〆切日は判っていない。それで「万句合料十六穴」だが、これは印刷物の代金ではなく句の入花料である。しかも一句の料金であることだ。

この頃の湯銭は六文。ぶっかけの安そばは十六文で、俗に二八そばという。（そばは粉二うどん粉八の割合からきた）

—居候二八一つで二度歩き 樽 44  
—十六文ほどの機嫌でけころを出 樽 拾  
—十六文は上野辺の私娼の取引値であつた。

—八文が飲むうち馬はたれてはいる 樽 3  
—六文で布子着ていく太いやつ 樽 12  
—安酒は一合、六文から八文だつたらしい。

こんな割高の入花料にも拘らず

「浅草新堀端の考士川叟万句合発し めつらなる言葉に当世のはいかいとひとしき句姿を新斧せしに或は一万或は二万の句あつまる事考士の妙とやいわん」（柳樽四編序文）



一 敬 木 八

誹風柳多留廿五篇研究

— (二七丁) —

482 酔を塩茶でさました八十四日

紀内「塩茶」は茶に塩を少量入れたもので酔さましの妙薬という。(広辞苑)

「十四日」は十二月十四日吉良邸打入の日。また赤穂は赤穂塩といって、塩が特産品であり、忠臣蔵関係句と思えどいまひとつ、状況がはっきりしない。

強いて考えると、一力で吉良をあざむくため、放蕩のまねごとをした内蔵助が、酔をさまし立派に仇討をなしたとげたことをこのように表現したものか。

西原一賛。内蔵助個人としないで、四十七士とし、これが元禄泰平の酔を仇討ちという美挙でさましたとも考えられるが如何。

室山「この句『時代川柳大観』頭註に『塩茶

紀内 恒久・青木 迷朗・西原 亮  
鈴木 黄・室山 三柳・入江 勇  
清 博美・八木 敬一・岡田 甫

は酒の酔をさます、赤穂塩をきかす」とあるが、これでは礎稿の疑問ははっきりしない。

当時は、茶会があったから、懐石料理に酒も出たであろう。その酔をさましたのではなからうか。それに礎稿の内蔵助の酔をきかせたのでは……。

八木一室山氏説賛。吉良邸は茶会の後の酒で酔っていた。それを赤穂勢の塩茶(赤穂塩を効かしていること、もちろん)が、いっぺんに酔をさましてしまった。

岡田一八木説の通り。

483 山の芋のと大木戸のよついでいひ

紀内「山の芋」は僧侶。高輪辺の僧は吉原ではなく、品川へ遊びに行く。勿論、坊主の形ではいけないので、医者等に形を変えてい

く訳であるが、高輪大木戸あたりの駕かきには、すぐに見破られてしまうのである。

品川は山のいもよりさつまいも

八・32

(品川の上客は坊主と薩摩藩士)

西原一賛。高輪大木戸は江戸の入り口として賑わい、四ツ手駕籠も待っていた。

「山の芋」は、「坊主ほっくり山の芋煮ても焼いても喰われぬ」という俗話から出て、僧の悪態語。

室山「山の芋のと」である。つまり増上寺あたりの僧侶と薩摩武士を駕籠かきが話題としている景であろう。

岡田一室山氏のいうように、この場合は「山」だの「芋」だのとニックネームを使って、芝山内の僧と薩摩邸の武士とを云ったと思いま

す。

484 草餅のひびき冠が横たわり

紀内―雑祭に草餅はつきもの、草餅をつく振動で難段に並んでいる人形が倒れてしまつていつことか。

青木―賛、人形が倒れるというより、原句の通り、冠が振動でだんだん傾き横向きになつてくる、というのであろう。冠は紐で顎下に結ぶから、すつば抜けることはないだろう。

西原―賛、「横たわり」というのだから、倒れたのであろう。その方が「ひびき」が効いてくる。

入江―冠が落つこちたことを「横たわり」といった。

岡田―同。

485 麗さ垣根のひたし物が出来

紀内―「ひたし物」はいわゆる「おひたし」のこと。しかし、「垣根のひたし物」が具体的に何をさすのか不明。

室山―『川柳年中行事』にあり、「ひたし物」の頭註は「枸杞の芽」となっている。

岡田―家内と娘は、句を詠みあげると同時に「クコ」といった。

むかしの庶民の垣根には、食用になるものを植えるのが多かったもの。

486 大学や援山日向にそっかへり

紀内―よく判らないが土用干の句か。

土用干では家具、着類だけでなく書物も並べて虫干をするのであるが、日なたに出しているという句か。但「援山」が何であるか全く判らない。

青木―書物の虫干説賛。風を入れるのが本来で、日なたに出せば、陽に灼け変色し、そつくり反えるのはあたりまえ。「援山」同じく不明。

岡田―「援山」知らず、残念。宿題とします。

なお日向に出しておくのだから曝書より、干見せ（露天商）か。

487 十三日うたが長いと叱られる

紀内―十二月十三日すすはきの句。鼻唄まじりの仕事、あまり長々と歌つてると、「この忙しいのにしつかりやれ」と文句が出る。現在でも見られる光景。

室山―賛。気忙しい中の歌はカンにさわるもの。

入江―大掃除に胴につく時のうた。

「めでた〜の若松様よ、枝も采える葉も繁る。お目出たヤア」。これからヨイシヨイシヨで胴上げする。

岡田―同。同一人を何回も、胴上げた場合か。

488 白たへの中をかすかにふぐの声

紀内―ふぐに雪はつきもの。雪の中「ふぐ売」が売りに来るのである。雪を白妙の中に洒落ただけの句作。

西原―賛。へかすかにふぐの声〜に柳味深し。

岡田―同。

489 絵に書ておいてもすんだたんす也

紀内―「女郎の空だんす」の句。遊女の部屋にあるたんすは、外見は立派であるが中味は空であつたという。

見かけは光りかがやくがからつぽう

明店と書てはりたいたんす也

引出しはすうい〜と何もなし

岡田―同。

# 川柳と美

戸田古方

東山魁夷画伯の「日本の美を求めて」(講談社学術文庫)という一〇〇頁ほどの本の最後の章に、「二つの故郷の間に」というのがありますが、これを紹介しながら、日本人の持つ短詩文学の中で、川柳ほど、徹底して、素直に、無理なく、日本古来の文化と外来文化との融合をさせているものはないということ

を申上げてみるつもりです。  
ドイツのケルンで開催された「唐招提寺障壁画習作展」での、この短い講演の要旨は、

「日本人は古い時代に、民族の統一をなし遂げたが、統一されて、単一民族となりはしているが、統一前にも、大陸その他の影響を受け、統一後にも、絶えず異質のものを上手に取り入れて来た。この島国の気候、風土は独特の文化を培いつつ、移入された外来文化への尊敬と親愛を持ち続けている。奈良・京都に近い神戸で育ち、この島国の風光に深い郷愁を持ちながら、神戸という土地柄、外国文化への憧憬の中で、人となつた私は、唐招提寺の鑑真和尚に捧げた作品の中にも、混然としているものを感じ

る。」

というのであります。

川柳は、十七音字にできるだけ納めるように努めるという以外、至つて自由、日常茶飯事から、社会の出来事、外国の思想や文化までがたつぷり入っています。また、日本古来の佻びや寂び、カンナガラの大和心と巾広く触れ、取り入れることができま

すが、私はいいますと、すぐ笑いがついてきますが、私には、この笑いの中にこそ、川柳の美があるのではないかと思うのです。というのは、真善美、真なるもの、善なるものは、美に通じる。川柳の笑いは、この真なるもの、善なるものの変身にちがいないからです。

私は、曾て、川柳の持つ笑いの段階を、私なりに分析してみました。アタマの笑いである穿ち、ハラの笑いである皮肉、諷刺、ムネの笑いである泣き笑い、人情味、そして、辿りついたのが、後光の射す笑いです。

凡聖一如元巨のころしる

路郎

私は、後光の射す笑いの例として、この句を先ず一番あげています。が、この句のど

こに笑いがあるのか、自分ながらききたくありません。そして、満ち足りた喜びからでなければ詠えないのがこの句だ、とわかっています。これこそ、後光が照り輝いているのではありませんか。真善美を超えた、正に聖の境い。全く、頭がさがります。

俳句の人はこの句をどう見るでしょうか。

私は、ある俳句の席で、

バタ焼きの浅利バンザイして揚り 古方  
というのを試みに出してみたところ、「俳句以前のものだ」と笑われました。俳句以前とは、柳俳の母胎、俳諧のことをいっているのかも知れません。

俳句は、後光の射す句だけを求め、美を自然に求めているようです。性に合っても、合わなくても、自然に寄り掛って離れない。勿論、生易しいものとは思っていません。

さて、川柳人はどうか。ずつと生臭いですが、身を挺して、汚濁に跳び込み、ドン底の、地獄の業火の中から、泥だらけ、血だらけになりながら、跪き、喘ぎ、後光の射すゴール目指して、匍い上ろうとしているのです。

「川柳の笑い」について、私は、

「川柳の笑いは、笑えそうに思われないうところにもある。ただ、真剣に生きようとすると心眼のみが、真の笑いを見付け出す。」

ベートーベンには耳が不自由になつてから不朽の名曲を作りました。ミルトンは目が見えなくなつてから失楽園を書き上げました。

よく見える目、よく聞える耳を持っているのは幸せではありませんが、見えすぎ、聞えず

ざるために屢々真相を掴み損ねます。笑いを美にするには、目や耳に頼りすぎるのも慎しまねばなりません。

「無」とか「空」とかいうと、とても縁遠いように思われますが、真剣に人生を見詰めるものには、案外身近かではないですか。ものの実体も知らず知らず捉えられます。説明を避け、描写の持ち味を身につけさせて呉れるのもこれでしょうが、何より、川柳の求める美を、笑を通して間違ひなく、これが捉えられます。これとは、眼に触れ、耳に触れるぐるり全でと、毛嫌いや戸惑いせず融け合つて、真実探求に邁進、精進することです。

つまり、人間の正体、社会の正体の究明、反省、懺悔。結果、「人生は全て喜劇である」と割切つたとき、その笑いは美と昇華します。如意、不如意を超越して、いつも、ニコニコ、ホタホタと満ち足りた人生をおくる、これこそ、川柳の理想境、人間陶冶の完成。

こういふと、川柳人は、まるで難行苦行の行人のようです。そんな川柳ならイヤという人が出るかも知れません。だが、一合目、二合目と辿り行くのを苦行と考へず、目標に達することができのです。山を愛する人が、「山があるから登る、それでも登る」と、登山を苦にしないのと似ています。そして、結果として、人間にでもらえるのです。それが川柳じゃないか。

東山魁夷画伯の絵の美しさは、こうした美醜を超えた最高の美しさをもつていられるからでありましょうが、われわれ川柳するもの

に全く近いもののように思われましたので、この本を紹介してみる気になりました。

もう一冊、本を持ってまいっておりました。最近「阪急」で出した「逸翁自叙伝」です。これが始めて活字になったとき、逸翁は「自叙伝」は面映ゆい。「私から見た私」あるいは「私」といふ人、位いに、自分なら題をつけるが、と、この本の仕舞に近いところで、述べていられます。この達人の言葉こそ、縷々申してまいりました今日のお話の、何よりの締め括りと思ひますので、あえて、付け加えてさせていただきます。(五四、八、七・本社句会)

## 路郎と政宗

八木摩天郎

古くとも僕には仁義礼智信

路郎

これは有名な路郎師の句である。その作句動機は、終戦直後確固たる信念を詠まれた句で、柳話でしばしば聞いたので今更贅言を要しないが、この句を思ふ時、私は政宗の壁書を懐く。

伊達政宗、江戸城にて諸大名と寄り集り、四方山話の末、外国交通から外国金貨を取り出し、甲より乙へ順次回覧、金貨は珍品、一同珍しく鑑賞したので直江山城守は扇子の上に受取つて見て居たので、傍らの大名が何に遠慮には及ばぬ、手に取つて御覧と云うと、山城

守は采配を持つて御座ると答えた。政宗はすかさず、左様か我が手は戦場で采配も取るが、雪隠では糞をも拭うぞと喝破、采配をも取り糞をも拭う自由自在の働きがなくては役にたたぬと、政宗の至言、一種の禅味がある。

### 政宗の壁書

仁に過れば弱くなる  
義に過れば固くなる  
禮に過れば諂ひとなる  
智に過れば虚言をつく  
信に過れば損をする

気長く心穩かにして萬に儉約を用いて金を備うべし、儉約の仕方は不自由なるを忍ぶにあり、此世の客に來たと思へば何の苦しみもなし、朝夕の食事うまからずとも、ほめて食うべし、元來客の身なれば好嫌は申されまじ、今日のゆきをくり、子孫兄弟によく挨拶をして娑婆の御暇すべし、と政宗は流石、松嶋の瑞巖寺中興開祖雲居和尚を師とし深く帰依の心を起して參拜した実に稀世の人傑だと、今にも伝わっている。

政宗は子供の時から一寸異彩を放つて居たらしい、五歳のとき松嶋の瑞巖寺に參詣して不動明王の尊像を見て、家來を顧みなかなか猛々しい姿じゃ、あれは何というものぞと問われたから、家來が、これは不動明王と申しまして、顔はかく恐ろしく候えど心は慈悲深くして世の人を救わせ給う御方であると申上ると、政宗うなすいて、これこそ武將たるもののでうべきものじやと云われたという事である。

# あすの川柳の指針

— 構造社刊・川柳全集②・麻生路郎に寄せて

東 野 大 八

構造社出版・川柳全集②麻生路郎・橋高薫風編が、発刊と同時に編者の薫風さんから私宛に届いた。この人らしい誠実な律義さと、温い友情のあらわれとうれしく拝読した。

麻生路郎先生といえは、そのかみ私は本誌に二年余にわたり「麻生路郎物語」を書いている。それだけに発刊元でこの企画が発表された時点から、深い関心と興味を寄せたことだが、その麻生路郎篇の執筆担当者が薫風さんと知って、まさに打ってつけの適任者であることに満足したところである。

なぜなら、今から六年前の昭和四十八年十一月のこと、薫風さんの個人句集「肉眼」の発刊記念句会が大坂で開かれたとき、その帰途の車中で

「麻生路郎先生の伝記があるといいなあ」と独語した私へ、助手席の薫風さんが

「それは私が書きます」

ときっぱりと言いつつ、この気力に溢れた肩筋を眺めて私は、このことがこの人の多年の夢であることを悟った。

この薫風さんの夢をさしおいて、つい「麻

生路郎物語」の筆をとった私だが、この車中のことがいつも頭の中に、しこりのように執筆中もつきまとっていた。実をいうとこのため「麻生路郎物語」は、先生六〇歳の還暦をもって終止符を打つことにした。その理由は師と密着した路郎門下の幾多の俊秀に後事を托すべきだと判断に出たことと、その最適任者に薫風さんを捉えていたからだ。

その意味から今回の構造社刊の本は、以上述べた私の心の負担を若干中和させる役目を帯びている点で、一応ホッとしたというのが時点における卒直な感想である。

さて、私事に涉って恐縮したが、今回の構造社刊の麻生路郎篇は、手際よくかつ技巧的によくまとめられていることに感銘した。何さま麻生路郎というその生涯を川柳一途に燃焼した川柳界の巨人である。それを限られたスペースで描き出すことは到底至難の部に属する。編者もこの本のあとがきで

「六巨頭といわれる川柳家の中でも、路郎先生は、作品・文章・講演のいずれも一流の才能を発揮されたので、論議にしろ随想にし

ろ膨大な資料の中から、所謂「氷山の一角」を選ぶ難しさを思い知らされた」と述べている。この点、私の体験からすれば私の「路郎物語」よりもその選別の作業は相当の困難が伴っていたことは容易に想像がつく。当然ここに路郎門下挙げての協力と、直接刊本にタッチする人々によるプロジェクトチームの構成が実現されていた。この路郎門

一丸の本書に対するスクラムの固さ温さには羨望の念を禁じ得ない。これも亡き路郎先生の遺徳に存するところとみるべきだろう。

まず、路郎作品四百句は、相当の苦心がそがれていたことが明確に読みとれる。膨大な路郎作品の詩歴がまざまざと読みとれる。編者薫風さんのたしかな詩眼があつてのことであろう。「作品を一頁五句立てにして文章の頁を増やすようにしてもらった」ことが、

かえって路郎作品の鑑賞味にスツキリとした後味を残すことになったのは結構である。編者の注文通りこの本の約半分のスペースは、路郎の川柳エッセイによって埋められている。その収録された路郎稿も、よく川柳人路郎の人間性の特に色濃いものが採り上げられており、苦心撰別の跡も歴然としている。

ともあれ古い演歌の題目ではないが、川柳を「骨まで愛した」詩人路郎の生臭いばかりの人間味が、各章に溢れている編集は、麻生路郎同様、その生涯を川柳宗に帰依したような川柳人には、その渴仰をみたすに十二分なものをもって、そつ信したい。

ともあれ、その門下が傾倒する師を顕彰す

る刊行本には、得てしてその師を「神格化」し、その人間の存念を忘却したたぐいのものが多いが、この本には人間路郎の一面が如実に迫力をもって描き出されている。そこに

「人間川柳」のあすの川柳の指針も介在していくことになる。そのような読後感をもつ量感に溢れた好著として、こころからの賛辞を惜しまない。

## ・書評・

# 「白い歯」

島居百酒著を読む

菊沢小松園

誰か他の人が読後の感想を書き感激を伝えて呉れるであろうと秘かに待って居たが一向にその気配もない。先日私は休日を利用して一気に朝昼晩と通読した。句集と違った独得の興奮を覚えた所謂戦記物の従来の日露戦の名高い「肉弾」や「この一戦」であれ皆、将校の戦記であり、或る程度指揮の出来る地位にある連中の戦争の体験である。

にして「白い歯」の全篇に漲る体験の熾烈な激烈さには本当に驚きの外ない。此処でも私の人を観る眼の迂闊さから今更のように人は見掛けに依らぬものという至極平凡な真理に感心した。

それと違ってこの「白い歯」の戦争観には生々しい庶民にも似た一兵卒の戦争体験である。此処にあるものは我々の眼であり、我々の耳であると思う。正に私自身の記録のような錯覚さえ覚える。さ程の身近さで読んだ。今だから言えることだが、私が初めて百酒さんにお目に掛ったのはもう何年になるだろうか。無論川柳塔になって初期の頃だから十年以上の年月にはなることだろう。その余裕のある体格の堂々たる割に妙に声の女性的な響のある人だなあと第一印象があって、この人

そして心からどん底の苦勞をされた百酒さんに有難うと御礼を申上げると同時に不幸な運命の下に異境に果無く散華された多くの同胞の靈に感謝の念しきりに、合掌を捧げたい。大東亜共栄圏と称え、他国の土地を我が生命線と呼び慣わして勝手に決め、独り良がりの戦争で国民の大多数に犠牲を押しつけ、運命を狂わして狭い国土を焦土にして、自らも滅亡して逝った戦争仕掛人、この思い上りの一部の人達に依って如何に多くの日本人達が苦勞と屈辱を享けたことか。物量の豊かな巨大な国を相手に、あれ程悲惨な敗戦の憂き目を負わされた国民、所謂生命線を失っても、古来の国土の上に尚且、立派に生きて来た日

本。大東亜共栄圏も我が生命線も皆、嘘だったと思ひ知らされた国民、当時の政治家の無力さを今更のように思ひ知らされるのだった。百酒さんの「白い歯」の読後感で戦中の思ひ出の苦しかった過去のことを思ひ浮かべて夜更けまで万感交々安らかな夢路を辿り得なかつた。だが、川柳家の書いたものだけに、全篇に漲る息吐く間もない圧迫感の中にも、ユーモアもあり、笑いもあり、どん底の人間の凶太さも大いに参考になって感心させられた。

近頃大いに感銘を受けた好著であり、一人でも多く戦争を知る人も、知らない人達にも読んで貰いたいとおもふ。そしてこの熾烈な記録を日本人の一人として心に受け止めて頂きたいと思ふ。

先日ある句会の帰りに古い番傘同人の川柳人と話し合った際に彼が曰く、本を出しても文を書いても川柳人仲間への反響の無さには、ほどほどと愛想が尽きている。読んだなら読んで何んか反響のあるべき苦の処だ。反論も結構、批判もよろしい、反対されても何にも音沙汰の無いより嬉しい。それは読んで呉れているという証拠になるのだからと言われた。私もずっと以前よりそういうことに氣付いて居たので全く同感だと答えて置いた。古くから川柳をやっている人間はよく同じようなことを思っているものだと面白く思った。斯ういう意味で「白い歯」の読後感に触れて、取えて充筆を馳せて駄文を勞した次第、大方の諒察を乞ふ。

# 水煙抄

川村好郎選

出雲市 石倉 美佐子

捨てられた方が根付いた挿穂かな

大阪市 西出 英子

膝許に崩れて泣いた夜半の月  
定石の私の場所は暗すぎる

ひとときの夢を嘲って馬巻舞う

明日から一人で生きる夜の恐さ

子を捨てて女は針の山歩く

いつの間か夫婦で歩巾合わせあい  
再会へ時効となりし裏話

手さぐりで落葉の中の栗拾う

柏原市 小谷 葉子

秋晴れに身辺雑事のうらめしく  
羽根ついていないかさつと札をみる

ダビにふす時も女にある呪文

熊本市 有働 芳仙

過ぎさりし秋のひと彩午後

純粹に生きる女の離婚歴

吊り橋をあなたの後なら渡る

40代の暦 一足とびに冬

福山市 桑田 静子

呼び合って聞える距離に老夫婦  
子沢山夫婦の枕遠くなり

寒翁が馬を信じて針揃え

啄木の歌を舞わせて鳴る風鈴

何歳になろうと母の子守唄

良識の垣押し倒すつむじ風

今治市 矢野 佳雲

踏みしめる意地が砂地へのめりこみ

二人だけで暮す小さな円を描く

俺がいなければと椅子にしがみつき

親友とあれから呼ばぬ廻り椅子

出雲市 園山 多賀子

躰いたはずみが転機の鍵拾う

赤とんぼ跳ぶ空があり過疎の昼

毎日が好日であり菜を問引く

振り向いた涙は持たぬ土根性

岡山市 井上 柳五郎

若い気もやっぱり齢か洩らす私語

ど忘れにかこつけ祖父はうまく呆け

やけ酒を飲む男まだ甘え抱き

ライバルの独り舞台だけ見る破目に

米子市 桑原 伊都

定退の気ままな夫の手綱とり

我が娘には別居させたい親心

愛情が指輪のメッキをカバーする

和歌山県 天満 三千代

まんじゆしやけ萌えて思い出持つてくる

風はらみ夫婦の帆船よく走る

すねている女にも吹く秋の風

誕生日声のお祝いとどけらる

鳥取県 石井 雅水

母という温みが消える手を握り

骨壺へ母を納める箸重く

骨壺を抱いて他界のあるを知り

香煙に遺影の母の笑み消えず

高根県 松本文子

精一杯生きねぎらいの茜雲

失敗も愛嬌老化と思うまい

永いこと忘れてました恋の花

ナニクソと小石を蹴れば緒が切れる

高槻市 竹内 花代子

鍔ずらり並べて暮の針はしる

公団に住んで居留守の鍵をかけ

名花一輪静かな秋の風に散る

水谷八重子逝く

名古屋市 越村 枯梢

秋の酒豊醸日本を噛みしめる

新築のビル屋上に赤鳥居

矢印は左へ小回りするばかり

岸和田市 吉水 照江

善意から云う一言が誤解され

夫逝きし歳と今年は同じ歳

幾山河越えて今日ある古稀祝う

尼崎市 中谷 利美

総入歯外せば自分の顔がない

貸さぬ気の泣き言だけは聞いてやり

口と肚違う同士が手を握り

泉佐野市 大工 静子

渡り鳥帰国かペナンの空に舞う

椰子並木我家と同じ花もあり  
回教寺院心もなじみてネッカチーフ

戦史ない城に怪談だけ残り

米子市 菅井未知

掛け終えて長寿喜ぶ保険金

白と杵今は我が家の文化財  
思い出の人いつまでもおさげ髪

寝屋川市 小林鯛牙子

良縁が決まり家計簿狂い出し

米子市 雑賀美世

ペランダの野菜で妻は彩を添え

満月に背を向け選挙カーが行く  
この写真小皺白髪もない僕ら  
生きがいの一人娘が嫁に行く

大州市 横田放人

巢立たせた子に手離せぬ愛のひも  
憂き事も聞えぬ幸も老いの耳

兵庫県 野々口ゆう也

ぼけるのも処世の術と言うずるさ

風を待つ風鈴の日々平で居る  
夕焼けがまぶしい今日の悔い残る  
秋空に吸い込まれしか友の逝く

唐津市 浜本久仁於

逃げ道を知らない妻でついて来る

蠅のろろ夏の終りを告げにくる

富田林市 大道美乙女

老孤独せめて欠伸を大きさに

何処の誰聞くこともなし釣馴染  
子が走り親が走って秋愉し

岡山市 串田匂味地

佐渡おけさ手振り揃わぬ宿浴衣

凡老の生甲斐剪定に日々追われ

八尾市 田中紀美代

持てあます腹を貫禄あると言う

老いてなおさせて頂く幸を知る  
朽ち細る鎌の古柄に苦節知る

大阪市 溝渕美紀子

レモン切る指はずみ出すある予感

天に向き青竹何を主張する

大阪市 白石潔

秋色に浸り女に戻らんと

寂しさに耐えかねダイヤル廻す指

Uターンのヤングが揃う秋まつり

朝風呂に入り嫁さん気兼ねせず

わたくしの秋を集めにひとり旅

補助椅子にやっと坐れたように生き

島根県 木村はじめ

ローカル線方言で席をゆずられる

駅までも無人になった過疎に住み

定退後婦唱夫随で日々平和

鈍行の隣の席が眠らせず

大和高田市 岸本豊平次

闘病の夫へまずいお献立

吹田市 藤原 世史春

豊かさは感謝という字忘れさせ

子に希望託してくらい朝を出る  
おみくじを引く気になった受験生

鳥取市 中森 葉士人

盗人のたけだけしさが常となり

肚の中かくしきれない口笛よ  
来年を言うまい余生へ月が冴え

大阪市 藤森 小雅子

血税を喰らう高官の天下り

栗飯がメニューに入る古都の秋  
夏やせへ味覚の秋にくらしい

歯車の一コマ外れた人生観

強がりの言葉の裏に見るもろさ  
裏通りそこに素顔の僕がある

羽曳野市 麻野 秋 畝

今一度の再起を期して名刺刷る

嘘と知る妻の笑顔が気味悪い  
相槌が下手で扁屈とも見られ

病院の廊下妊婦だけ胸を張り

島根県 園山 栄

秋風に闘志新たな朝が来る

山茶花の意気見せられた寒い朝  
振り上げた斧ずらそうか気の変り

鳥取県 和井 観 洋

妥協せぬ背筋に刺さる眼の刃

銀行ローンで建てましたお墓  
民宿で息子の嫁に欲しいひと

富田林市 中村 優

明日は明日今日のページはうめて置く

憤懣の置き処なく石をける  
決心の底に言いたい事残し

ふり向けば明日の俺が崩れそう

出雲市 板垣 夢 酔

シルバースート人の善意を試めされる

岡山県 岡山 岩道 博友

辛薄き人の詩集は読み漁り

豊中市 満仲 きく子

言い負けた方が先に電話切る

米子市 青戸 美佐

不況風今年のサンタ荷が軽い

香川県 田井 教之

ちらしずし亡母がわたしの中で生き

巣立たせた子の足音の遠くなり  
行き暮れて着くあてもないひとり旅

強くあれ子の母なれば母なれば

香川県 田井 教之

栗が炸せ静かな過疎の秋祭り  
桐一葉一葉に風情以って散る  
倉敷市 中島彩平

走る子と距離がへだたる老の足  
孫の背の伸にいそいそ四つ身裁つ  
米子市 野坂なみ

呼び捨てにされ怒ろうか悲しもか  
諦らめと希望を載せた夫婦船  
尾鷲市 渡辺伊津志

羽ばたいて小鳥よ空の広さ知れ  
風向きへなびく心を自嘲する  
羽島市 時田誠一

旅人の心みたして湯はあふれ  
老妻の気まま今更気にもせず  
西宮市 山田喜代子

舟出する父を夕陽がせきたてる  
おさの音響く故郷の夜のしじま  
寝屋川市 立床晴風

ゴキブリの年中住める近代化  
日本に蚊帳あり夏のいい姿  
大阪市 内藤ますえ

この人と捨身できた甲斐があり  
親ばなれさせて夫を思い出し  
大阪市 橋元美恵

偽りの平和米ソの谷で揺れ  
東予市 小山悠泉

新築へ少し嫉妬もある祝い  
新しい靴は裏道歩ゆまない  
新宮市 辻式

さよならのそれから夜風が喋りだす  
今更と言うおんなの捨てせりふ  
出雲市 吉岡きみえ

実道湖の舟はうごかず秋日和  
花道に縁ないピエロにある意気地  
和歌山市 堀端三男

花道を歩いた男の汚職劇  
横尾の山にも弘法の影見たり  
大阪市 林ひろこ

登り坂谷の河鹿に励まされ  
衣食足り礼節知らぬ人が居る  
松山市 竹内寿美子

人は皆善なり両手合すとき  
明日と云う文字で慰められて生き  
唐津市 田口虹汀

友人急病の報に接し  
お見舞を上半身で受けて笑み  
唐津市 山下勝一

群盲に象を撫でさす総選挙  
一枚は見せぬ政治家二枚舌  
京都市 松川芳子

子に歩巾合わして母の忙しい  
一年がこんなに早い虫の声



玄関の靴が負い目の俺を見る

樫原市

西本保夫

嬉しいとも言えるが技術アテにされ

諫早市

江副二牛

吉報を迎えてはずむ台所

尼崎市

中辻千子

もう知らぬだが捨て置きぬ親の愛

大阪市

岡田ふみ

一週間貸したげる気の孫婦郷

岸和田市

原サヨ子

溺愛は子の成長を逃がしてる

島根県

岩田三和

生きづくり鯉の口など見てならぬ

鳥取市

武田帆雀

向い風追い風軸に回される

唐津市

桑原掬治

過去を泣き未来を憂いて渡り鳥

唐津市

浜本義美

高年の汗を会社は安く買い

鳥取市

森田熊生

雑草のまた伸びて来る根気知る

東広島市

石井さわ子

一区切りついて妥協の酒となる

青森県

波ただお

大根を洗い亡母の手を思い

今治市

和田宏

下っ端へ罪をかぶせてパスポート

豊中市

出口セツ子

主逝きて忘れられたる柿一つ

岡山市

花田たけ志

敬遠をされて無口が独り酌む

枚方市

栗林光夫

太陽を盗んで罪にならないか

★

大州市

米沢暁明

うつぶんを晴らすに海が広すぎる

台風もそれてこころはいいしめり

思い切り拍手が出来ぬマイク持つ

国賓の扱いされてパンダ逝く

女いま一人でいては悲しすぎ

岐阜市

市川鱗魚

父の軌道は少こうし右による話術

ふり返る未練もあろうめがね拭く

太く短かく男は天と地が味方

星捨てた小さな悔いにある地蔵

未婚一代花は美を去る時がある

胆石症で入院

東京都

池口呑歩

胆石ゴロゴロやっぱり神が罰をくれ

胆石ゴロゴロ夜死神と対話する

胆石ゴロゴロ医は仁術に縛るのみ

胆石ゴロゴロ病院の窓高過ぎる

胆石ゴロゴロだが悪運をまだ信じ

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

伊藤 茶 仏

健やかな耳御好意を貯めておく

川端 柳子

「物事のよしあしや価値判断を的確に知る、  
「健やかな耳」「好意を貯めておく」この  
のゆとり着想技法ともに高く評価したい。  
帯止めも衿も女は秋のいろ

若柳 潮花

ときすました秋の装いにびつたりした和服  
の似合う女が少なくなった。潮花師匠の健吟  
を願って止まない。

使い捨てされたのが来る安定所

黒川 紫香

使い捨てを美德とした成長期、暗転して合  
理化省力化の低成長期に人員整理の犠牲にさ  
れた中高年齢者の吹き溜まりに陽が当る日は  
夫婦して築いた城に子は住まず

鈴木かつ子

家族主義のよさを取り入れようとしている  
欧米と逆に核家族の進む日本、なんとか歯止

め対策が欲しいものである。

ほどほどのほどが解らぬのに困り

奥谷 弘朗

日本語の持つ曖昧さを穿った、マンガ的な  
表現を買いたい。

夫の背へ愚痴をあずけている安堵

錦織 文字

愚痴を突っ張らない奥さまの手綱さばき、  
やんわり背なで受け止められるご主人の鏡の  
呼吸はおみごとである。

じゃんけんで負けてついでの用も聞き

堀江 芳子

いちにちがだいじ六十七になり

堀江 正朗

堀江ご夫婦の作品を毎月賞味させて貰って  
いると、私の手近かに手の届くところに住ん  
でいられるような錯覚すら感じます。

みな忘れさせて枕はありがたし

工藤 甲吉

この作者には哲学がある。(生意気言うてご  
免なさい)どの作品を拝読しても、枯淡の境  
地がにじみ出ていて敬服。得難き師である。

ポックリと死に葬式でうらやまれ

森田 布堂

須崎豆腐の句を思い出させる句。ご家族の  
悲嘆とは別に、ポックリ死ねたら、苦しまず  
死ぬ、世に言う安楽死に焦点を合わせて軽妙  
さすがにいたしましたこともある子が巣立つ

榎本 吐来

結婚当時の、「子はかすがい」の思い出と、  
立派に巣立って呉れた吾が子への感謝を、不

思議な夫婦の結び目として微笑ましい。

あげ足を取られてからの失語症

高橋 夕花

あげ足取りを武器にしている政治家もいる  
勇み足を突かれて、閉口する場面をズバリ失  
語症と結んだあたりは老練である。

問診に一つの嘘が埋めてある

林 露杖

問診に患者としてのプライベートがある。  
それを「一つの嘘が埋めてある」といなした  
ところに川柳がある。

折り鶴と眠れぬ夜を分かち合う

西山 幸

この作品はリズムカルにうたい上げた力作  
として推賞にやぶさかではない。

霊験があらたかか聞く屋根の反

岩井本蔭棒

全国的に霊地めぐりの参拝客で賑わう中で  
霊場の屋根の反りを信仰に結びつけた技巧を  
評価したい。

家計簿へメガネ上げたり下したり

松高 秀峰

メガネを上げたり下したりのしぐさは、中  
年期になれば避けられない所作の一つでもあ  
る。厳しい家計簿への挑戦がどう展開するか。  
癌と言う証拠は癌を口にせず

平田 実男

進んだ医学でも転移した癌の治療に決め手  
がない。とすれば早期診断、早期治療で命を  
守る手立てしかない。癌を禁句としての介護  
は、むごたらしい言葉につきる。

# 川柳と人形劇と

(2) ——— 随想風に

## 山村祐

詩と人形劇と、一見何の係り合いもなさそうな両者が、五〇年来私の胸に共存してきた。川柳歴はまだ三〇年にも足りないが、旧制中学時代に書き出した詩の歴史と通算すれば五〇年を越える（もちろん永いばかりが能じやないが）人形劇は昭和五、六年頃、築地小劇場で人形劇団ブークの舞台を見て、早速ブークへ入団した（但し最近の一〇年間は人形劇の創造の仕事からは離れている）それらの歳月をとおして詩と人形劇を意識して結びつけて考える機会は余りなかったが、互いに無縁の存在では決してなかった。言わば私の胸底にある一つの根っこから生えた二本の樹だという思いがある。なぜなのであろうか。

基本的には、小さな形式への愛情と、未完成なものへの愛着、ではないか、と自分で納得している。

一行の詩形に拠る川柳が小さな可愛い形式であることは論を俟たない。

そして人形劇もまた然り。人形劇への愛着は、まず人形そのものへの愛情から始まる。

戦後人形劇がテレビなどでマスコミの偶に採上げられるようになると、人形劇志願の若者の数も増していった。しかし肉体的な条件などで舞台俳優としての成功をあきらめて、次善の策として人形劇を志してきた人々は、決して永續きはしなかった。しかし人形への愛着にそそのかされた人は、人間の舞台では表現出来ない人形劇独自の魅力に索かされていた。人形も人形劇も、どこか底の方に「可愛い」という感情が働いているように思えてならない。

人形劇の原始は神人形に発しているが、劇としての発生は、決して壮大な形式を伴うものではなかった。阿波に発した箱人形など、典型的に小さな舞台である。首から吊した木の箱の上で、小人形を踊らせながら全国を流浪した。そこには人形劇の原点的なものが残されていたに違いない。沖縄の人形チヨンダラーも同様であつたらしい。徳川の昔、近松、義太夫らによる素朴な舞台から降つて、竹田出雲らの人形浄りの舞台のドラマチックな改

善と、吉田文三郎らによる人形カラクリの精巧化などで、人形浄りの舞台は大型化した。が、底を流れていたものは、やはり人形の可愛さ、可憐さに支えられていたと思う。例えば巡礼お鶴の小さな指が反り返って白く空間へ泛ぶとき、そこに可憐さを感じない人はいなかったであろう。

そして世界の詩のなかでいちばん小さな詩形。川柳と俳句の型式の可憐さは、何よりも私を索きつけて止まない。

しかし俳句の創造方法はほぼ完全に近い。千数百年の間に築かれた日本人の美意識の上に構築された有文語定型という創造方法は、今では時代的なズレを感じさせはするが、その完成度が深いからこそ、袋小路的な行詰り感からの脱出への試みが、明治以降、俳人自身によって度々行われてきた。

川柳の口語は生活感情を表現することにすぐれている反面、社会の推移の影響による変化の速度は驚くほど早い。伝統詩として最も

若い古川柳が、古代の万葉、古今、新古今などの和歌と較べて、むしろ語意の解りにくくなってゆく傾向が指摘出来る。変化の少い文語と較べて、詩語としての口語は、長所も欠点も同時に抱え込んでいる。また川柳には季語季感による既製の美意識の助けも、切字の思想も浅い。その創造方法は未完成であることは認めざるを得ない。俳句を老人とすれば現代川柳はほとんど裸の幼児性を残しているとも言えるかもしれない。だからこそ、その未熟さ故に、私はこよなく現代川柳に案かれるのである。未完成には夢がある。老人に未来はない。きこちなく素朴な人形の動きにも似て、現代川柳のよさは、その幼さと共にその活力にもあるとも言えるであろう。口語にはバイタリティが溢れている筈なのである。

川柳も人形劇も、ともに省略と単純化に支えられる詩でありドラマである。

パリのイヴ・ジョリイの人形劇には、省略と単純化の典型的な舞台がある。例えば次のような人形によるパントマイム。

舞台(註、彼の舞台も高さ一米五〇程ほどの横木へ黒幕を垂らした簡単なもので、人形使いはそっかいで人形を操る)を白い紙片が横切る。黒い布が現われてその白い紙を拾い上げ、クルクルと円く巻いて黒い布へ立てると顔になる(目も鼻もないのだが)顎鬚がつけられ、シルクハットをかぶると、黒いマントの紳士が即席に生れる。同様にして、色の布が現われて別の紙片が円められ、ボンネッ

ト帽子をかぶり、緑色のショールをかぶると若い女になる。紳士と女は踊り始める。下手に画家の使うキャンバスが現われる。その陰から同じく円められた紙の顔へ築地帽に似た帽子をかぶった絵かきが登場。女を誘う。女は初めイヤイヤをするが、やがて絵かきと踊り始める。当然男たちは女をなかにして争いを始める。シルクハットと築地帽とがと替えられてしまうほどの烈しい争いをもって替えられて。しばらく後に解体してしまふ。男たちの手には、女であった白い紙片が一枚つつ残されただけである。男たちはその紙片をも投げ捨ててなおも争う。遂に男たち自身も、それぞれ一片の紙片になってしまひ、ヒラヒラ舞いながら、虚しく散ってゆく……。

イヴにはこのようなパントマイムの傑作が多いが、彼のすべての人形舞台に言えることは、極度の単純化、それらが描き出すポエジーの豊かさである。非常に独創的で、説明臭いや描写的な要素をきらう。従来の人形劇の概念とは多少変わったものが多いが、一九五〇年代末のフランス、いやヨーロッパのなかで最も実験的なブレイを行う劇団であった。彼の芸術を抽象派とは言えないが、抽象的な手法も適切に取入れて、観客の連想と空想のなかで表現上演技を行う。表現上の制約を逆手にとって効果をあげる様式。それは一行の短い詩形に拠る川柳や俳句の性格とも深く通じ合うものがある。例えば断絶と省略の深さ。人形劇としては最もリアリシックな動きをずすとと思われる

いる文楽の人形でも、必しも人間の動きそのままではない。そこから反って最も人間臭さを印象つける演技が生れている。川柳や俳句も同様、もし断絶や省略が失われてしまったら、一行詩形表現の魅力は残らないであろう。イヴのパントマイムのように、人形劇は、そして一行詩形作品も、観客(読者)の想像力を湧きあがらせて、その想像力の世界で演技を行い、詩の世界を築いてゆく。

そして舞台の上の現実はいくまでも再構成された現実である。現実の真似ごとであってはならない。日常性へ埋没して見失いがちな典型的なものを引摺り出して、拡大強調して示さねばならない。現実以上に現実的なもの、詩で言えは詩的世界を創り出す。それは総ての芸術に関して言える性格だが、人形劇独自の、川柳や俳句独自の手法がそこに見られるのである。

また、人形劇も一行詩形作品も、基本的に「型」の芸術と言え。文楽で一番美しいのは、人形の後姿がきまつたとき。様式美の極地を見る思いがある。そして川柳も俳句も一行という詩形に拠ると言う約束に繋がれた表現である。定型、非定型を問わず、型を踏まえた詩であると言えよう。ただ俳句と較べて、様式美の完成に於て川柳はまだ弱い。流動的な性格をもつ口語の使用には、様式美の定着を防げる要素が働く。ここにも現代川柳がこれから解決してゆかねばならぬ問題が横たわっていると思う。

# 愛染帖

## 橘高薫風選

雪原の一樹浄土の道しるべ

兵庫縣 辻 文平

癌に寝て白いシーツがこわいかな  
悪女かも知れない私の長い髪

八尾市 高橋 夕花

姑のやさしい心萩ふまぬ  
果物買う男の鬚り見てしまふ

大阪府 藤森 小雅子

ループタイ似合い老いらくの恋燃やす  
自画像を画くと秋が深くなり

浜田市 佐々木 裕

秋の蠅妻と俺へも告げ口す  
口利かぬ妻は郵便手で渡す

倉敷市 水粉 千翁

きこちないけれど失うものがない  
手をつなぐところ分け合う手をつなぐ

鳥根縣 榑 原 秀子

愁心へ赤いとんぼを見付けたり  
人を恋う紫式部の粒の数

八尾市 渡辺 章

川原の石に混じりて空を見る  
ふるさとに繋がるもののみな美味し

鳥取市 武田 帆雀

サイドから覗みのきいてる会社だな  
カトリックヌードヌーブに遠い風を受け

愛知県 池田 香珠夫

果てしない田周率に似た行路  
彼一語我一語して酒うまし

町田市 竹内 紫鏞

ままごとの児らの背に似るゴミ袋  
古き良き町失敬という別れ

米子市 八木 千代

切れた糸指に巻きまき残り旅

冷蔵庫の錆に可愛いシール貼る

和歌山市 西山 幸

悲しみの瞳にあざやかな木守柿  
風の沁む魂みつめ栗を剥く

岡山市 川端 柳子

牛のどか阿蘇の噴煙どこに立つ  
スタチころころ笑いころげる人と居て

京都市 都倉 求芽

青空の井戸を九輪汲みきれず  
木の葉一枚一枚秋の遺産分け

宝塚市 吉田 笑女

病人を見舞い京都の雨にぬれ  
決断を妻の一言にぶらせる

富田林市 岩田 美代

やさしいと言われた日の自己嫌悪  
哀しい程澄んでる空で賭けられぬ

堺市 高橋 千万里

母が来る何にしに来るか知っている  
決めかねて花の匂いを嗅ぎに立つ

和歌山市 坂口 公子

臥せるたび十字の彫りが深くなる  
ポストとも皆見つくして山の駅

鳥取市 河村 日満

そつ肥えておらぬ好みの裸婦を描く  
間違いをとおす男の軽い咳

平田市 久家 代仕男

ふり向いた顔と重なる亡妻の  
仮初や愛たしかめに山を下り

兵庫縣 遠山 可住

街をゆくひとりとひとりの人ひとり  
山へ行く男わたしを置いて行く

倉敷市 小幡 里風

ため息をついて呑んでる胃の薬

倉敷市 小野 克枝

青森市 工藤 甲吉

鳥根縣 堀江 正朗

今治市 月原 宵明

倉敷市 田垣 方大

高知市 宇佐 美和子

高知市 西川 富恵

愛恋歌コップに上る泡のごと

高知市 西川 富恵

高知市 西川 富恵

高知市 西川 富恵

税務署で話す事情はドラマめき

東大阪市

三宅哲夫

琴の音を引き立たせてる萩の花

今治市

矢野佳雲

安心のポーズくるりとぞうり虫

高知県

風子

はすかひになると正体ない影絵

兵庫県

中田白李

二日酔昨夜も我を忘れすぎ

和歌山市

津田与史

彼岸花激しく咲けど悲しげな

和歌山市

浦野和子

気の弱い男と遊ぶおしき草

和歌山市

藤原桜山

好きな字と嫌いな字とが出来て老ゆ

和歌山市

山本博也

ああ平和見事に出来たパンの花

和歌山市

山本博也

和をもって貴しとする無責任

和歌山市

山本博也

火の好きな夕焼トンビ火の中へ

和歌山市

山本博也

冗談を飛ばしてホスは座を外す

和歌山市

山本博也

名月やひとり生れてひとり死ぬ

和歌山市

山本博也

名月を名所に訪ねる宿の下駄

和歌山市

山本博也

盛り場の灯が消え焼芋売れ残る

和歌山市

山本博也

アペリアの蔭に猫らの修羅場あり

和歌山市

山本博也

ハミング俺は無名の作曲家

和歌山市

山本博也

多すぎる政治の謎へ不感症

和歌山市

山本博也

三味線の似合う寺なり十輪寺

京都府

松川杜的

身勝手な愛の経緯を落葉聞く

和歌山市

柴田英壬子

逢筆にやや責任もあり誤植

新宮市

大矢十郎

娘には娘の階段汗に生きる価値

和歌山市

林瑞枝

おくれ毛の項へ迫る冬の章

和歌山市

松原寿子

女坂まだ登ってる紅をひく

和歌山市

西岡洛醉

満たんす日に過去の傷うずき出し

和歌山市

佐伯越子

耐えている涙を妹見せにくる

今治市

越智一水

安楽に死んだか遺影笑ってる

名古屋

大林曲ん手

父の絵をなぞりながらも父に似ず

鳥取市

中森葉士人

くつろげる我が家の庭の石の顔

鳥取県

梅みどり

修羅出土迷の一つを解くように

和歌山市

石垣花子

劇画より読めん大人になりまつせ

和歌山市

戸古方

雨嬉し秋篠寺の石畳

和歌山市

戸古方

人名簿赤で消す日は月も出す

和歌山市

戸古方

有難うなしの人生淋しがり

和歌山市

戸古方

虚勢張る女の指の冷めた過ぎ

和歌山市

戸古方

六法全書人を活かす法であれ

鳥取県

清水一保

二三日花の彩とめふきだまり

和歌山市

野坂なみ

遠き日のロマンは哀し仲間頼まれる

西宮市

朝山千世子

花束を流す樺太へ続く海

和歌山市

福本英子

コスモスの蔭に夢二の絵の女

和歌山市

若宮武雄

大夕焼沈む心を湧きたたせ

和歌山市

内芝としよ

嬉びも悲しみもある発車ベル

和歌山市

今村夕路

立場上お母さんです家内です

和歌山市

岩田三和

老人の素直になったを不安がり

和歌山市

古野ひで

風邪ごときで一週間も寝るも年齢

和歌山市

宮尾あいき

初孫へ子にはなかった夢を抱く

和歌山市

桑原伊都

中流の意識が持たすマイカーで

和歌山市

白石潔

ひとり居の腰痛さする者も居ず

和歌山市

白石潔

筋通し節を曲げずに村八分

和歌山市

白石潔

隙間風亡き子想えば乳房張る

和歌山市

白石潔

切札を持つてる男眉たしかり

和歌山市

白石潔

山水の画には見惚れる深さあり

和歌山市

白石潔

津市 浜本 義美  
 ホーフラが湧くから水を替えてくれ(選挙)  
 莒面市 出口 セツ子  
 ノラと同じ悲しみ夫の顔を見る  
 旭川市 朝倉 大柏  
 父の日へリボンをかけて子の叛旗  
 岡山県 直原 七面山  
 男勝りの娘にジーン 倉敷市 藤井 春日  
 自然から見れば人間ピエロです  
 大阪市 大野 武男  
 悪人になれず小さな店をもつ  
 倉吉市 奥谷 弘朗  
 逃げられた様な気になる別居にて  
 岡山県 出原 敬一  
 猫の死や屋根に石置き病める過疎  
 尾鷲市 渡辺 伊津志  
 冷静になろうと海を詠み続け  
 岡山県 岩道 博友  
 倅せに話す老師の膝の猫  
 岡山市 井上 柳五郎  
 同じ屋根下で保革へ票が割れ  
 岡山市 砂田 静佳  
 一すじの煙で夫と別世界  
 名古屋 越村 桔梢  
 その中で泳いでみたい雲もある  
 高槻市 若柳 潮花  
 名月が飛び込む窓を明け放ち  
 鳥取県 和井 観洋  
 天高く秋はほとんど熟れてゆく  
 今治市 新居田 胡頼子  
 曼珠沙華に無常の感を覚えけり  
 富田林市 中村 優  
 草もみじ葉にベンの呼吸かな

豊中市 満仲 きく子  
 久々の帰郷ざくろの高笑い  
 鳥取県 羽津川 公乃  
 期待した階段昇れば薄埃  
 兵庫県 野々口 ゆう也  
 作意ある演技と知らず正座して  
 米子市 青戸 美佐  
 人間の弱さ祈りて支えられ  
 羽島市 時田 誠一  
 雑踏の中で孤独が渦を巻く  
 岸和田市 清野 こう  
 作業着を脱ぐ足元に散るうろこ  
 鳥取県 鈴木 村諷子  
 背伸びしてみてもたかだか二米  
 唐津市 岩崎 實  
 郵便夫城の石段息をきり  
 唐津市 田口 虹汀  
 明日と云う文字で慰められて生き  
 岡山県 稲岡 正之  
 閃光が女心をかきたてる  
 大阪市 北勝 美  
 赤い羽根作業帽に生かされる  
 貝塚市 行天 千代  
 役付いて寄附を張りこむ羽目になり  
 出雲市 板垣 夢酔  
 達磨は猫にとらめっこしては転がされ  
 出雲市 高橋 可保留  
 酔うほどに亭主の自慢どくくなり  
 出雲市 高見 鐘堂  
 バイパスに反対裏で動く金  
 米子市 雑賀 美世  
 老母迎えやつと落着くマイホーム  
 大阪市 川口 弘生  
 五十歩百歩明治大正昭和一斤

八戸市 島田 昭治  
 生きざまを子等に褒められ胸を張り  
 岡山市 串田 句味地  
 せっかちが妻の呑気に試される  
 島根県 木村 はじめ  
 虎よりも恐い人間放し飼いの  
 大阪市 欄 蘭  
 軍歌まだ歌う若さが残ってる  
 唐津市 山下 勝一  
 もの言えは物価の話秋の風  
 倉敷市 齋藤 通風  
 のみ夫婦さしかけたのは男傘  
 青森県 五十嵐 操史  
 まわりから覗かれていて照れもせず  
 出雲市 園山 栄  
 過去を捨て走るランナー振り向かず  
 熊野市 坪田 冬花  
 夫婦の中で子はうまく舵をとり  
 島根県 飯塚 虎秋  
 公約は秘書の作文読んだだけ  
 唐津市 浜本 久仁於  
 秋風と残暑が同居する九月  
 香川県 田井 教之  
 交代もないのかかし片足で  
 鳥取市 野沢 大漁  
 澄んだ眼と心は違つサギに会い  
 鳥取県 石井 雅水  
 み仏もお金次第の名を貰い  
 唐津市 桑原 掬治  
 のそのそと大型台風北々東  
 山口県 高崎 雀声  
 仕事への熱中そのまま定年時  
 島根県 堀江 芳子  
 眠くなるまでの柳誌が眠らせず

—水煙抄—

## 秀句鑑賞

—前月号から—

不二田 一三夫

本号の執筆を東京の山根白星氏にお願いするため、前月号の初校が出た日、ケラ刷りをお送りしたが、脳疾患でご入院中とのこと、奥さん？の代筆で速達が届いた。

一日も早い退院の吉報をお待ちします。

そんなわけで、急にどなたにも頼めず、またペンを代わって執ることにした。このペンは81行でお願いしているが、拙稿のように一章ごとに一行アケると読みやすいようにおもつ。

人恋し人煩わし山路ゆく

愛しさは四季花それぞれ自己主張  
いそいそと家事くり返す幸もある  
まっすぐに生きて度量を狭く居る  
髪型をかえるも夫に問うてみる

西出 英子

故西出一栄さんの長男（洋一氏）の奥さんである英子さんは三人の男子の母でもある。川柳は今年「勝山双葉会」句会が初出席とい

う、まったくの新人である。いきなり天の天を争い、「南大阪川柳会」では天の天に輝きまたは最多数入選で巻頭になったり。水煙抄、初参加で右のように五句入選。この人には苛酷？に近い花々しいデビューである。しかし人間、苦しさに耐えてこそものごとの上達があることを忘れないでほしい。

呑み込んだ涙もやがて明日の糧  
うれしさを毀さぬように千鳥掛け

桑田 静子

この人も好郎氏選NHK川柳「老後をたのしく」の出身で、まだ川柳を始めて日も浅いが、すでに「秀句鑑賞」にも登場し、今年の「川柳塔賞」で準優秀作の受賞もしている。

ノクターン相手はどうに寝てしまい

田中紀美代

シヨパンが云う抒情的な、そして幻想的なピアノの夜想曲がこの一句に流れている。

釣り竿の先端 秋が動かない

山本 博也

静かな風景だ。木の葉一枚の侵入者もない。恩師故秋田実先生は「川柳は好きだが、句を詠むときすべてが「静止」してしまふ。漫才台本は「動き」が生命だから作句はしたことがない」ばくにはわかるお言葉だ。

たこつばに浜木綿活けて海女の宿

木村はじめ

汐風、浜風、波の音も聞こえる。たこつばが川柳的だ。

永遠に生きつく野草花持たす  
離島女ひとり呑み込みし  
去り難く荒波くぐる石拾う

高杉 千步

高杉鬼遊氏夫人だが、この人の句はもうすでに出来ているとおもう。第二句目「離島」は送りがながないと「リトウ」と読んでしまふ。

借金の糸口までの無駄話

江副 二牛

去る十一月二十五日、熱海市の錦ヶ浦海岸で自殺した漫才のWヤングの中田治雄さんが野球トバクの借金で自殺した。気の弱い彼は借金するのいろいろな話をもちかけモジモジしながら自分を殺す金を借りたであろうと思えば、可哀そうでならない。

幕下りて親子の顔になる役者

堀端 三男

舞台は「連獅子」か。

しつけ糸だらけで妻に飼われるや  
すがかつこ  
大垣たもつ  
石井さわ子  
橋が出来渡しの詩がまた消える  
ひとときの幸せ画廊の昼にいる  
堀口 欣一  
中座した後の成り行き気にかかり

頭髪のごとは禁句の六十路なり  
岸本豊平次  
藤原史春

# 続・川柳師走の顔

昭和四十八年 一月号から  
昭和五十四年十二月号まで

## 不二田 一三夫

改題の年の40年から46年の1月号までの中から師走の句を拾い、47年12月号に約四ページ紹介した。「続」はどなたかに頼むつもりでいたが、約四ページへ句を埋めるとなると相当の時間がかかる。そこでやはり自分でやることにした。

48年の1月号から54年度1月号と12月号を調べることにした。2月号にもあるかも知れないがそこまでは手が届かなかった。

丸一日つぶしたが、前回の半分も師走の句がなかった。これはどうしたことなのか。

生活が安定して「師走」なんか怖くない、ということかも知れないのとクリスマス・イブも家庭で楽しむのが多くなっているので脱線の句もすくないのだろう。そういえば昨年あたり、街のジングルベルの音も低かったよ

うにもおもう。

同人吟と水煙抄の中から抜いたが、句会吟などにおもしろい句があったかも知れない。

まあ、三面記事になるような句のなかったことは二同慶の至り。

まはたかぬリズムで除夜の鐘をきき

生々庵

無作法で不気味なままの年が暮れ

同

除夜を待つ炬燵に万太郎句集

史好

十二月神父も人間臭うなり

故牧人

大晦日バチ(盆)を被って鯛が着き

不酔

十二月どうにもならぬ思案する

静歩

松屋町の風がつめた十二月

同

十二月新幹線がもどかしく

同

十二月僕の歩巾は変らない

故いわを

ジングルベル鳴るとて痛む歯ほつとけす

同

皴面へ又正月が近づくか

美子

年の瀬に身を置きたくて街に出る

遠好

十二月一息いれて吸う煙草

史晴

なりそつでどうにもならぬ十二月

同

百八つ梵字を彫った鐘うれし

杜的

赤い羽根スターが売ればよく売れる

蘭幸

雑沓の中へ出て行く十二月

故春巢

十二月私服の男にも出合い

緑之助

除夜の鐘出番待ってる御米迎

岳人

一年が倅せだった除夜の鐘

♀女

年賀ハガキを買って師走へ指を繰り

誓二

十二月ともかく爪に灯をともし

鶴声

この次はどこで借ろうか十二月

故宗義

揉み手して待たされて買う十二月

寛

ワッショイワッショイ米価ガス代交通費

どんたく

年の瀬へまさかが噂のようになり

圭井堂

安定剤飲んで切り抜く十二月

春日

十二月どこかで太鼓の乱れ打ち

勝晴

木枯しの妙音サッシに通じ兼ね

ろ亭

まわり舞台これは見事な除夜の鐘

生々庵

年の瀬を泳いで帰った折を提げ

故宗義

友情も計算済みにした師走

同

煮豆屋の夫婦の顔も十二月

史好

バーゲンの列 木枯しを意識せず

ろ亭

十二月の風 地団太踏んでいる

可動

十二月忙中閑や賀状の想

鬼遊

木枯しか いいえ夫の骨が鳴る  
 十二月雪と喋べれる山の峰  
 十二月なのに女の長話  
 餅つきが機械に変わり味気なし  
 十二月やりの珠も動きかね  
 極月の鐘 自嘲の顔うつす  
 もらいもの廻わし上手な妻にして  
 除夜の鐘車中で聴くも旅なれや  
 ゆく年や恋のかけらも拾わずに  
 十二月今年も妻が締めくくり  
 除夜の鐘聞きながら出る御来迎  
 木枯しに嘯く不満撫でられる  
 宝くじ私に一と月夢を見せ  
 行天千  
 ありがとう今年も越せそう老いの身も  
 カレンダーたった一枚にある重さ  
 木枯しに吹かれて老いの気の弱り  
 ポーナスのプランは妻が立て平和  
 顔見世に浪花おんなの派手好み  
 家計簿が黒字ですんだ年の暮  
 ほんものの夫婦になって歳が暮れ  
 歳の暮れ二人三脚すばらしい  
 十二月チャイムが鳴れば集金屋  
 おでんふつふつ外は木枯し  
 来年の暦に小さい陽が昇る  
 受太刀のままで今年も終りけり  
 十二月社長も腕を試めされる  
 日めくりのここから先きは賞与待ち  
 一年を顧みる日を持ち合わせ

美子 岳人 英詩 丁路 明春 好郎 栞史 篤史 史好 岳人 滋雀 好代 同郎 貞男 茶人 欣一 篤史 生々庵 同吉 甲吉 鬼遊 同 孤呂二 方大 草右 久米雄

ポーナスが近い上司にさからわず  
 百八つ鐘に去年を聞き流し  
 宝くじ予約で買つて張りがない  
 サラキンの広告目立つ暮の街  
 ポーナスをねらうネオンの色が冴え  
 十二月叱られてゐる仏性  
 十二月独身貴族はまだ起きす  
 十二月三十一日山へ行く  
 故林田實先生と毎年ミナミへ出る  
 みそかそば師弟の味も家族亭  
 木枯しに冬眠がほしいなと思つ  
 年の瀬に金の絡んだ記事多し  
 十二月八日そしらぬままで顔洗つ  
 赤い羽根善意の街のバスポート  
 十二月話もだんだん世帯染み  
 ジングルベルの街をポーナスが歩く  
 カレンダー一枚今年も無事にすぎ  
 枯れ葉ささ忙しそうに舞う師走  
 除夜の鐘余韻がこもる陶冶の詩  
 年の瀬を善意の温い風も吹く  
 十二月桂馬の術で逃げ回り  
 十二月に勇退迫まる十二月  
 十二月借金返えすと山は雪  
 麻生路郎著「旅人」から  
 十二月剃刀持つて怖わがらせ  
 十二月首だけ入れて呑んで行く  
 十二月まがりくねつたところで飲み  
 十二月自分のうちへよりつかず  
 十二月うれしい風も少し吹け

翁童 千翁 カスエ 世史春 岩光 方大 岳人 二三夫 枯梢 夢酔 鬼遊 柳志 与呂志 同女 武雄 太茂津 操子 甲吉 英詩 岳人 路郎

**柴田午朗句集「繭の木」**が昭和54年11月1日鳥根県川柳協会から発行された。所載の三百七十句は著者の昭和四十五年以後の作品で「川柳の伝統を踏まえつつ、現代人としての私自身の感懐を作品に加えたつもりである」と著者があとがきで書いておられる通り、尖鋭で繊細な現代性が横溢している。柴田午朗の作品という、仮令難解なものでもそのよさを追求し模索しながら優れたものを撰取しようと私は努力しながらだが、仮りに云つて、「人間座」の現代的センスのある数人で「繭の木」の全作品の鑑賞評釈を逐一座談的にされたら、どんなにわれわれを啓発するだろうかと思つたことである。

蝶白きわが片側をかなしめり  
 反戦歌若者昼の月を焼く  
 父の日に一匹のふく釣つてくる  
 心がつきこさるる花の真正面  
 心経がきこえる花の真正面  
 番傘の句風を斬新にした人の句集なのである。

**石丸弥平画文集**「雪国の覚えがき」が昭和54年9月15日伸光社から発行された。新聞や雑誌に下町画家として活躍、先般NHKの朝のテレビ小説「いちばん星」のタイトル画を担当、好評を博され、謂は油の乗り切つた著者が今度、山形を中心に雪国の抒情を筆に「川柳」構造社出版から出ている総合雑誌「川柳」の表紙絵で馴染みの童謡が聞えてくるような世界である。文章も、「いちばん星」取材のことなど味わい深い。定価千八百円。(薫)

贈り物

内海幸生選

心より見得が勝つて贈り物 八文銭  
 肩書に掌かえす贈り物 優  
 母の日の母を泣かせた贈り物 不二  
 贈り物の中味もわかる間柄 一保  
 歳暮の予算落して義理をたて 春日  
 贈り物裏の心が敷いてある どんたく  
 寝たきりに下駄を贈って敬老日 枯梢  
 砂糖なら邪魔になるまい贈り物 夢酔  
 母の日へ共同出資の子らの知恵 大柏  
 これ以下はデパート任せの贈り物 素身郎  
 ええものを見つけた贈ってしもてから 古方  
 贈り物りボン嬉しい彩でゆれ 洛酔  
 義理だけは忘れぬ姑の贈り物 胡頰子  
 年金の生活しへ孫の贈り物 カズエ  
 その裏を察して欲しい贈り物 一路  
 贈り物少し不足な顔で開け 里風  
 椅子きしみだす身勝手な贈り物 度  
 水引きへ無理を結んだ贈り物 佳雲  
 贈り物ノーと言わせぬ額でくる 方大  
 年金がサタンに化けたプレゼント 裕  
 贈り物返してよいやら悪いやら 一休  
 古里の山栗届いて秋高し 弘  
 座右とする友の心の贈り物 斎

贈り物ライトを浴びてほしいもの 美恵  
 余つてるところへ集まる贈り物 満津子  
 下宿から母に送る洗い物 きくこ  
 預かって気になる隣の贈り物 なるこ  
 婚殿がくれた可愛い贈り物 武水  
 平凡な男になった贈り物 可住  
 贈り物無理したらしいのもまじり 軒太楼  
 ホーナスを裂いて心の贈り物 雅風  
 誕生日プレゼント待つ子に急ぎ 喜代子  
 贈り物するのには気兼ねの要る団地 代仕男  
 見えすいた心が分る贈り物 道子  
 犬咆えるたびお隣りへくる歳暮 花明  
 留守番へ渡して悔む贈り物 宵子  
 留守番へ渡して悔む贈り物 宵子  
 贈り物自分が欲しい物を買ひ 秀峰  
 贈り物くしやみされそな気で選び 雅水  
 お歳暮を決めると肩の荷一つ降り 綾女  
 贈り物開けば母の匂いする みどり  
 人間に格差をつけて贈り物 通風  
 おばあちゃんの知恵借りてくる贈り物 文平  
 住  
 親心エゴも含めた贈り物 ろ亭  
 兄の写真添えて姑への贈り物 義美  
 贈り物言い訳一緒に乗せて来る 博友  
 贈り物くすくす指紋笑ってる 本蔭棒  
 贈り物駐在さんがふと迷い 登美也  
 人  
 点滴の静寂へ揺れる千羽鶴 彩平  
 地  
 贈り物無駄だったと知る帰り道 右近  
 天  
 贈り物 昔は俺の部下だった 勝一

川柳塔柳箋

一冊 百五十円  
 送料 二百円

二冊以上になると送料が安くなりますので  
 お得です。

軸

ヒモ付きで貰う可愛い贈り物

ツリー

榎本吐来選

キャバレーのツリーは天井までとき 七面山  
 肩組んだのがツリーからよろけ出る 本蔭棒  
 クリスマスツリーもう喜ばぬ子に育ち 春日  
 百貨店からクリスマスマスが来るツリー 素身郎  
 アメリカで日本製と云うツリー 勝美  
 凡人の暮しツリーの夜静か 洛酔  
 ミニツリー吊しイブ待つ重症児 胡頰子  
 愛情を話すツリーの蔭に入り 博友  
 クリスマスツリーをよそに共稼ぎ 一進  
 年賀書くパバをツリーへ呼んでくる 里風  
 サンタ待つツリー煙突なんか置かない 度  
 託児所のツリーは高いところへ置き 佳雲  
 讚美歌にツリー五色の灯を弾き 彩平

吟 題 課

特価品ツリーも歪む奪い合い  
 聖し夜の施設のツリー小さくとも  
 居酒屋にイブのツリーが明滅し  
 クリスマスケーキにツリー無視される  
 商戦へツリー一役買つて立ち  
 クラマーをかけてツリーの品撰び  
 今宵また甘い囁ききくツリー  
 プレゼント信じた笑顔のツリー吊る  
 客寄せのツリーに雪はまだ降らず  
 クリスマスツリーほくにもあつた夢  
 良きパパとなつてツリーを囲む歌  
 母と児の童話がともすツリーの灯  
 個性あるツリーをほめたりけなしたり  
 クリスマスツリーに豊かなひま貰う  
 手作りのツリーが嬉し幼稚園  
 宗教と別にツリーの灯をともし  
 ワケ知らぬ子等がツリーを待つ平和  
 ツリーから松へ商戦あわただし  
 一本のツリーへ父の国を聞く

彩平 軒太楼 豊生 代仕男 宵明 虹汀 登美也 多賀子 雀声 不二 隆子 大柏 度子 方大 宵明 花子 不二 可住

保育園ツリーをかざるご住職  
 華やいたツリーに子等の目がひかる  
 歳の経つ早さツリーとの対話  
 商魂の重さにツリーはうなだれる  
 孤児の目に大きくみえた日のツリー

實 同 里風 枯梢 観洋

母子寮のツリーは星と何語る  
 ツリーくぐつて童話の国へ旅をする  
 信仰のないのがツリー派手に出し

カズエ 比呂志 無人

家具の位置変えのD.K.にツリー立つ

軸  
 年越し

小西無鬼選

年越しに苦肉の策の空手形  
 年越しの父残業の灯が明かい  
 プライバシー侵さぬハワイで年を越し  
 借金は一円もなく年を越し  
 年越しを刻む秒針ようしやなし  
 息子もう浪人でない年を越し  
 除夜告げる汽笛鳴る鳴る港町  
 大晦日来年こそはの蕎麦の箸  
 温泉で年越しせよと邪魔がられ  
 神々も年越しの件審議中  
 再建の夢のまま年を越し  
 小銭だけになってボーナス年を越し  
 何が変わるねやろ今夜が年越し  
 稽古ごとみんな半端で年の暮れ  
 長針と短針重なり年を越す  
 くる年を越さねばならぬ借がある  
 ビル眠る都会に年越しなんかない  
 年越を案ずる母の電話来る  
 年越しに子供嬉しい事はかり  
 出稼ぎの父陰膳の晦日そば  
 義理悪い先も残して年を越し

優 早苗 北海 七面山 雀声 本蔭棒 春日 夢酔 三和 大柏 素身郎 古方 カズエ 一路 里風 度

去年の垢落さぬうちに年替り  
 年の瀬を年金で越す不況風  
 年越しを何度も倉庫の米にさせ  
 すつきりと爪剪り揃え年を越し  
 除夜の鐘待ち草臥れた子の寝顔  
 悔多き一年だった鉄洗う  
 年越しの夜勤の夫に酒も添え  
 年越しに羽織着て行くところがある  
 ベトナムの子も聴け日本の除夜の鐘  
 年越しの厄除け神符信じ切る  
 年越しにやりくりの嘘妻の知恵

ゆう也 弘朗 無人 彩平 代仕男 悠泉 越子 文平 久仁於 句味一 勝一

肩の荷がくい込んだまま年を越し  
 釣書を出しつ放して年を越し  
 駅前の屋台で年越しする夜勤  
 停年になって静かな除夜の鐘  
 年越しが出来そか胎動日強く

軒太楼 宵明 白李 一進 雅水 綾女

余生又一一年減つて年を越す  
 老眼鏡置き忘れたまま年を越し  
 年越しと言うのに救急車が走り

方大 博友

川柳塔社同人の胸にかがやく  
 シンボルバッジ  
 一個 千百円  
 (送料共)

女性用のもあります。

# 初歩教室

題 — 証 拠 —

本田恵二朗

作句することは、自分の心の中で、じっと耐えたり、温存している何かと対話することである。耐えているからこそ感動が、ほとぼりしり出るのである。

感動がなければ句は生れてこないであろう。その感動こそ句を生み出すエネルギーだ。

些細な出来事でも、ついそこに見る風物でもただ見るだけでなく、心の鏡に映して、つかまねばならない。そこから想像力が芽吹いて来て、句を創作するに到るのである。

修飾をし過ぎないで、つかんだ真実を、わかり易く表現することは、作句に限らず、あらゆる文章を書くコツであると言われていることも知っておきたい。

証拠にはならぬ飲み屋のマッチ見せ 大漁  
(マッチぐらいいでは証拠と見てくれず)

(飲み屋のマッチなど証拠にならないわよ)  
頑張った夫の生きさま顔に出る 美 恵

(頑張った証拠夫の顔の汗)

(頑張った証拠夫が汗臭い)  
ふた心なき証拠見せてと駄々をこね  
(ふた心ないという証拠ねだられる)  
健康な証拠に薬も医者遠くなり  
(健康な証拠医薬に縁がない)  
消しようもないご機嫌でご前様  
(千鳥足消すに消されぬご前様)  
年とった証拠にこの頃腹立てぬ  
(年とった証拠か近頃角がとれ)

紅のあと何より証拠とせまられて  
(紅のあとこれが証拠よ証拠よと)  
証拠にもならぬアリバイでつち上げ  
(でつち上げたアリバイの塔がくずれそめ)  
いい汗を流した証拠腹がへり  
信じても証拠の判は受けておく  
(信じてよのだが証拠印は押し給え)  
今ならば話せる証拠抱いている  
(今なれば話せる証拠にカビがはえ)

顔色を変えた証拠を見逃がさず  
(顔色が変わったぞ証拠見つけたぞ)  
ハワイ行って泳いだ証拠と肩を脱ぎ  
(ワイキキで泳いだ証拠のビキニあと)  
動かない証拠へ鬼も首を垂れ  
汗まみれ生きた証拠の財を積み  
(汗臭く生きた証拠の城を建て)

長いものに巻かれ証拠も引つ込める  
出るとこへ出ると証拠がものを云い  
(出るとこへ出たら証拠が喋り出し)  
粗相した証拠蒲団に地図が出来  
(お粗相の証拠が世界地図を描き)

精農の証拠ミカンの玉揃う

千子  
テルミ  
武 男  
キクミ  
朝 子  
公 乃  
な み  
同

(鈴成りの蜜柑が精農ですと云い)  
証拠の無いままやむやに放つとかれ  
(証拠が無いまま噂もいつか消え)  
物忘れの早いのも老いた証拠  
(老いた証拠がよく忘れよ忘れ)  
金婚の夫婦に証拠などいらぬ  
若い気の証拠の髪が薄くなる  
(若い気の証拠かつらを買つと決め)  
叱られて証拠並べる子の瞳  
髪一本証拠となりて罪逆転  
(髪一本が証拠となりて逆転勝ち)  
もえている証拠どちらも明るい目  
(愛してる証拠どちらも目も見える)  
色あせた証拠に妻の口答え  
(色あせた証拠を盾にする妻で)  
目の光人の潔白証拠だて  
(真すぐい視線が潔白証拠だて)  
揃うても証拠打消す横車  
(横車揃った証拠を轆き逃げる)  
証拠持つ追求の目に兜脱ぎ  
(判一つ押したばかりに責め寄られ)  
澄んだ目に出合えば証拠などいらぬ  
(澄んだ目が白の証拠だどめまい)  
(澄んだ瞳だそれが証拠だ白である)  
建前があるので証拠が任用よ  
(建前が証拠見せろと本音吐き)  
隠滅を天知り地知り人も知る  
背信の証拠握っている微笑  
次々の証拠に黙秘喋り出し

幸代  
同  
胡頰子  
同  
保 夫  
同  
静 佳  
同

ますえ  
同  
同  
武 水  
同  
静 枝  
同  
可保留  
同  
勝 美  
同  
美 世  
同  
三 男  
同  
八文銭  
同  
露 杖  
同

同

同

同

同

同

同



大 萬 川 柳

「便箋」 入選発表

選 者 川 村 好 郎

投 句 総 数 三 百 二 十 三 句

入 選 五 十 五 句

富田林 美乙女

便箋の追伸本意を喋り出し

便箋に倅せ躍る娘の便り

豊 憲 祐

便箋に叱られるほど書き損じ

しきたりの良さ便箋の白を添え

寝屋川 あいき

満足な顔で便箋折りたたみ

踊る指で開けた便箋一枚きり

大 阪 誓 二

夢二調の便箋が好き少女病む

便箋五枚胸の想いがまとまらず

幸 代

押し花も便箋にのる良い便り

便箋ならすらすら書ける愛の文字

和歌山 幸

便箋に凝っても映えぬ悪筆で

便箋にときめく文字をからかわれ

米 子 伊 都

便箋の君の心と対話する

便箋が電話で足りてメモになり

和歌山 寿 子

出稼ぎの無事の便箋祀られる

便箋へ想いの筆が冴えてくる

西 宮 喜 代 子

便箋を前に思いが行き来する

便箋は逢っては言えぬ事を言い

富田林 花 梢

二時を打つまだ便箋は白いまま

便箋だから厚顔しいことが云え

和歌山 三 男

便箋に移り香があり恋匂う

便箋へペンが重たい無心状

大 阪 柳 志

便箋へ怒り一氣にペン走る

平 田 代 仕 男

花柄の便箋で来る無心状

今 治 佳 雲

便箋の死角に本心理めてある

神 戸 とんたく

便箋の隅まで詰めるエヤメール

木 子 千 代

便箋へ書く借用証は多寡が知れ

和歌山 公 子

便箋にまだ息吹いてる亡母の文字

和歌山 公 子

便箋の字が踊ってるいい知らせ

和歌山 素 身 郎

便箋も和紙に決める筆達者

和歌山 春 日

便箋へ別れを書けぬまま一日

松 原 久 子

これしきの誤字で便箋丸められ

奈 良 本 蔭 棒

彩褪せた便箋文箱でしゃべり出す

和歌山 和 子

あの人に出す便箋の彩を撰る

和歌山 紀 久 子

便箋を前に拝啓あとが出す

和歌山 武 雄

一枚の便箋印がある重み

和歌山 武 雄

便箋に母の涙を見てしまひ

長 崎 和 子

便箋の表も裏も書いて母

大 阪 寿 幸

便箋を何枚破る恋心

大 阪 午 郎

破られる予感便箋秘めている

兵 庫 午 郎

恋文は便箋にまで気を使い

大 阪 道 子

私用にも会社の便箋使つとり

大 阪 道 子

思慕つるの便箋筆が炎えている

大 阪 道 子

子を諭す文字便箋を埋めつくす

大 阪 道 子

便箋の白さに嘘がためらわれ

大 阪 弘 生

社名入りの便箋で来た初便り

大 阪 柳 志

便箋で頼めば電話で断られ

大 阪 柳 志

便箋に手垢のついた釣書見る

和歌山 通 風

便箋に書けぬ心を読みとらせ

和歌山 通 風

読んだら焼けとは便箋の不倅せ

和歌山 吸 江

真白な便箋別れ告げている

東 大 阪 綾 女

便箋の仮受取りが喋り出す

選者吟

便箋に書かず借用あてにせず

昭和五十四年度

ベストテン（十月現在）

- 一 満津子 一八〇 大阪
- 二 百酒 一六五 西宮
- 三 寿子 一六〇 和歌山
- 四 道子 一五〇 大阪
- 五 千代 一四〇 大阪
- 六 柳志 一三〇 大阪
- 七 和子 一五〇 和歌山
- 八 美幸 一三〇 大阪
- 九 小雅子 一三〇 大阪
- 一〇 優子 一二〇 富田林
- 一一 花梢 一一〇 富田林

昭和五十五年第一回

- 一 武雄 一二〇 和歌山
  - 二 真砂 一一〇 大阪
  - 三 吸江 一一〇 藤井寺
  - 四 文秋 一一〇 大阪
  - 五 夕花 九〇 八尾
  - 六 右近 九〇 守口
  - 七 和歌山 一二〇
  - 八 大阪 一一〇
  - 九 藤井寺 一一〇
  - 一〇 大阪 一一〇
  - 一一 八尾 九〇
  - 一二 守口 九〇
- 「序幕」三句以内  
縮切 十二月二十五日  
第二回  
「片手」三句以内  
縮切 一月二十五日
- 以下略  
千593 堺市堀上緑町一ノ三ノ七  
藤井二三方 大萬川柳係

### 大萬川柳会の会則

- 一、本会は川柳に興味を持たれる全国の同好者ならどなたでも投句出来ます。
- 一、毎月の出題並びに選は川村好郎が担当し、投句は一人三句以内、用紙はハガキに願います。投句は係りが到着順に一句毎に句箋に清記し、無記名のまま一連番号を附記し順序混ぜかえて選者に渡し選句します。
- 一、毎月二十五日締切、入選発表及び出題は毎月の川柳塔誌上に掲載されます。
- 一、左記の採点法により月々の得点を加算して順位を定め、毎月のベストテンを発表します。同点の場合はその月の投句先着順とします。天位四点、地位三点、人位二点、佳句一、五点、平抜き一点。
- 一、毎年十二月締切分から翌十一月締切分までを一年度として、順位を定め、年度ベストテン把持者に賞呈し、大会の選者に推し懇親宴に招待します。なおベストテン第一位には梅里賞をもって表彰します。
- 一、本会の大会は毎年二月に開催します。

本会の会費及び投句料は不要。但し大会の会費は別に定める。

一、投句その他の連絡先は大萬川柳係へ。

### 川柳塔社常任理事会（11月5日）

開会の五時前後、急に時ならぬ大粒の雨が降り出し、雷鳴と共に空は墨を流したようになる。十一月というのに扇子がほしい暖かさだ。どこかの政党のように天界もゴタゴタしているのかも知れない。

大阪文化祭川柳大会の模様を与呂志氏から報告があった。柳宏子氏が準備その他、与呂志氏が受け付けなどを手伝われたそうだが、川柳塔の人たちが他句会でカチ合ったため出席者がすくなかったようである。

最近勤め先きの都合で句会受け付けの人が足りず、どなたかお手すきの方があればお手伝い願いたいとおもいます。

55年度の新年宴会は1月13日（日）夕刻五時から八時ごろまで上本町六丁目のなわ会館で開くことになった。参事、常任理事、理事その他、編集部、句会部の方々もご出席

## ★年賀広告受付！

★今年から一口五百円になりました。したがって五段の一段が二千五百円です。

★最終受けつけを十二月七日の本社句会まで延ばしましたので、どうぞよろしくお願致します。



正に超人的活動である。  
 ▼山根白星氏(東京都)は  
 脳疾患でこ入院中とのこと  
 一日も早い退院の吉報をお  
 待ちします。

▼菊田いさむ氏(京都市)  
 は阪急電鉄株式会社資材部  
 購買第二課長に栄進された。  
 ▼越智一水氏(今治市)か  
 ら「第21回全国郵政川柳大  
 会(10月21日・熊本観光ホ  
 テル)へ選者として出席。  
 第2回目の活動賞タテを受  
 けました。松江の町紅さん  
 と同じ部屋に泊りました。  
 ▼西田柳宏子氏(大阪市)

から「故城一舟さんの遺句  
 集を、文秋さんと選句、編  
 集をしています。句は滋雀  
 さんに腕筆をふるってもら  
 いました。  
 ▼本多柳志氏(大阪市)か  
 ら「11月旬会は亡母の一年  
 忌に当たり郷里の松江市へ  
 親族一同集まります。欠席  
 おわびします。

### 新同人紹介

井 上 柳 五 郎  
りゅうごろう

岩 道 博 友  
いわみ ひろゆ

花 田 た け 志  
はなだ たけし  
 「久米雄・照路・二三天推薦

三 宅 ろ 亭  
みやけ ろてい  
 「多久志・二三天推薦

▼旅 信△  
 ▼黒川紫香氏(尼崎氏)か  
 ら「水客さんと二人で高山  
 を振り出しに10月28日御岳  
 山六合目の濁河温泉へ宿泊  
 早朝噴火に遭遇。早々と御  
 岳山を退散しました。

▼櫻谷寿馬氏(尼崎市)か  
 ら「薫風、鬼遊さんと二人  
 で松江へ来ています。川柳  
 塔にこんな会があればと思  
 ったりしています。

▼12月の旬会△  
 ▼菜の花旬会は10日(月)  
 六時から西郷会館(八尾神  
 社境内)で開催。近鉄大  
 阪線八尾下車西南歩三分。  
 題/火事・栄選/忘れる・  
 幸生選/未来・鬼遊選/大  
 詰め・未定。席題二題。各  
 題五句。投句は郵券百円。  
 投句先八尾市高安町北一の  
 二五・大路美幸あて。

▼南海川柳部は20日夕六時  
 から南海電鉄本社食堂内で  
 開催。題は「減量・あいま  
 い・一人歩き。

▼南大阪川柳会は20日午後  
 六時から松崎町三丁目大萬  
 で開催。題は「意外・走る  
 ・嘘・皿。

▼東大阪川柳同好会は22日  
 六時から東大阪市中央公民

館2F(近鉄永和駅南)で よい年を  
 開催。題は「豪勢・煮る・ お迎えください  
 餅・年号」席題二題当日発  
 表。  
 柳界展望係

柴田 午朗 著  
 川柳句集 「藜の木」 定価二千円  
 発行所 松江市南田町四九 島根県川柳協会

山根 泉人 著  
 「島根県川柳史」 頒価二千円  
 発行所 松江市南田町四九 島根県川柳協会

何を選んでいただくか  
 は先様におねがいして  
 タカシマヤの商品券を  
 お贈りするのにも 心に  
 くい贈物かと存じます

一〇〇円から  
 一〇〇〇〇円迄  
 大阪・東京・京都  
 3店に共通です

高島屋  
ばなばな ほんにん ほんにん ほんにん  
 大阪 東京 京都

# 本社 十一月旬会

会場 金属会館

七日 午後六時

今月ご出席の方は大儲けである。柳話が栞氏と小松園氏の二つ。帰りには川村好郎氏の喜寿記念に出された川柳句集「遍歴」がいただけだ。さすがに路郎門の高弟だけに、その珠玉の佳句が各ページに輝く

10月号の予告に栞氏の柳話が出ていて、11月号の予告には小松園氏となっている。これは栞氏が11月初旬、韓国へ旅行されることになっていったところ、朴大統領事件が起り、観光旅行が出来なくなつた。そんなわけで両氏が半分ずつ柳話をしてくださることになつた。

栞氏のお話は外国人から見た日本。フランスの「レクスプレス」誌の表紙に「真赤な太陽を背に鎧兜の日本人が太刀を腰にオートバイで走ってくる。そのほか好話がつづき、特に「柿食へば鐘がなるなり法隆寺」の句へ、

「なぜ柿を食べば鐘が鳴るのか」というあたりは圧巻だった。外国人らしい質問は、柿でなくともトマトでもよいのではないかと、は句が「動く」ということか？

降壇する栞氏と、登壇する小松園氏がプロレスのタッチのように手を合わせ満場をつなすあたり名優だ。

小松園氏のお話は「源氏物語」は「夜這い話に過ぎない」と、まず痛撃して話が進んで行く。よい友達の三条件①知恵のある人②相談に乗ってくれる人③物を呉れる人だ、

そうだ。また持つてはならない友達は①陰で悪口を云う人②金の無心をいう人③健康過ぎる人。となつてゐる。この三番目がちよつと判らない。内容はこうだ。健康な人は同情心が薄い。のだそうである。

このあたりから氏の少年時代に逆コースをとり「新・源氏物語」となる。隣家の人妻に懸想して裏の物干し場から忍びこみ、それがバレて母親からお仕置きを受け、押し入れへ入れられたくだりには満場笑いの渦が巻きおこる。

本社旬会へ初めての方が何人かおられた。来月もお待ち申しております。

今月の月間賞杯は、本年の路郎賞に輝いた和歌山の松原寿子さんだった。

進行・西田柳宏子・記録・高杉鬼遊

受付・児島与呂志

出席―古方・雅風・与呂志・幸太郎・滋雀・薰風・瓢太・水客・潮花・紫香・新之助・勝美・栞・規不風・桐下・奈杏珠・生々庵・憲祐・英子・太茂津・百酒・千万子・蘭・川

狂子・綾女・あいき・浜崎・小雅子・喜風・一三天・酔々・翠光・柳宏子・万彩郎・三寸

四・翠公・晴美・吸江・小路・恭太・誓二・千代三・満津子・道子・修史・みずほ・形水・岳人・洋敏・庸佑・度・文秋・白兔・史好・萬的・寿子・柳選・弥生・柳伸・好郎・鬼遊・涼一・雀踊子・小松園・頂留子・鎮彦・凡九郎・葉子。

席題「ゆつくり」 山本翠公選

ゆつくりとペタルを踏んで秋の空  
 ゆつくりと聞けば何んでもない話  
 ゆつくりと歩いていても突き当り  
 ゆつくりとつかる朝湯は旅のもの  
 反対の意見へゆつくり立ち上り  
 宿命を知つて牛で急がない  
 ゆつくりな意見が腹にしみてくる  
 ゆつくりとしてたら牛肉影もない  
 陽の当る老の坂道ゆつくりと  
 ゆつくりと打つても父の釘が効く  
 ゆつくりと話せば威丈高となり  
 ゆつくりとくどくどつもりで酔つてゐる  
 人生はゆつくりと行こう落ちこぼれ  
 スロースロースロイとお彼岸さんをゆく  
 ゆつくりも出来ぬ子連れの里帰り  
 ゆつくりと読むから弔辞らしくなり  
 ゆつくりと殺し文句を言つてやる  
 喝采へ駄馬はゆつくり風に乗る  
 ゆつくりと信号渡る過去をもち  
 ゆつくりと生きてゆつくり死にまひよう  
 ゆつくりと喋る恩師の目がさすとす  
 ゆつくりと読む友情の温かし  
 ゆつくり屋が居て幹事眼を配る

勝美 憲祐 潮花 綾女 小松園 憲祐 涼一 修史 規不風 洋敏 滋雀 鬼遊 千代三 潮花 一三天 恭太 寿子 道子 古方 小雅子 小雅子 栞

来客へゆつくり見える肥えた妻  
 ゆつくりとあげのお経で有難し  
 ゆつくりと納得させた雲に乗る  
 ゆつくりと浸れば嫁に覗かれる  
 隙のない瞳ゆつくり判を捺し  
 母連れてゆつくり出来る旅を練る  
 金持ちはゆつくりゆつくりめしを食い  
 ゆつくりと男の嘘を受けとめる  
 ゆつくりと押す実印を信じよう  
 ごゆつくりごゆつくりにと急がせる

席題「台所」 金井文秋選

台所一目でわかるきれいすぎ  
 台所男ばかりと言うリズム  
 火の車上手にさばく台所  
 姑に預け無駄ない台所  
 女の城と言えなくなつた台所  
 タイニングキッチン戸惑う故郷の母  
 泣くときも妻がかげ込む台所  
 台所嬉しい客へ軽い音  
 台所何か淋しい妻の留守  
 共稼ぎ今日は御主人台所  
 台所モデルハウスが素敵なり  
 ゴキブリがマラソンして台所  
 2DKサロンに変わる台所  
 ゴキブリとねずみが遊ぶ台所  
 台所に四季の花あり妻がいる  
 帰省する子に忙がしい台所  
 台所で出す汐時を待つている  
 顔出して娘に叱られる台所  
 亡母の味まだ生きている台所

道子 幸太郎 規不風 晴美 柳宏子 小路 小三夫 水客 桐下 翠公 千万子 潮花 道子 綾女 柳宏子 憲祐 百酒 雀踊子 度 洋敏 誓二 規不風 潮花 水客 桐下 紫香 憲祐 一三天

台所苦しく猫まで家出する  
 新世帯二人でたのしむ台所  
 設計へ妻が口出す台所  
 台所をいっぱいにして客が去に  
 新装のキッチン妻はハミングで  
 母音の匂いは隣りの台所  
 母さんの書斎にもなる台所  
 妻や子を思う飯場の台所  
 妻病んでリズムの狂う台所  
 台所隣りの湯呑みも借る祝い  
 村が町町が市になる台所  
 嫁の座の涙知つる台所  
 嫁の知恵で明るくなった台所  
 教室と台所の味違い過ぎ  
 よみがえる手足故郷の台所  
 ハミングでキッチン好きなのを煮る

兼題「効用」 竹中綾女選

敬老会若がえりの効用もてている  
 セールの世辞にうっかりひっかけり  
 一っぱいの効き目話ぶりまで変り  
 流し目の効用女計算し  
 嘘効いてすこし明るい病室で  
 効用に弱い女的美容器具  
 ききめのないからアテランスに決める  
 ちよつとしたトアルギヤラで切り抜ける  
 メモに切るチラシの裏のつかいみち  
 効用は確にあった袖の下  
 リフォームにママの古着が生きてくる  
 名刺ばらまいて客を待つ夜の蝶  
 効用をうるよりスターの顔で売り

一三夫 万里 百酒 紫香 あいき 一三夫 満津子 桐下 喜風 与呂志 幸太郎 滋雀 恭太 庸佑 規不風 文秋 夢酔 度 静馬 どんたく 幸 曲ん手 千代三 翠公 滋雀 桐下 文秋 吸江 洋敏

陣笠に効き目確かな札の束  
 効きめだけ書いて書かない副作用  
 効用よりニューアイデアのコマーシャル  
 効用は二の次義理で買うて来る  
 すりむいて皮膚の効用教えられ  
 バイパスがついて静かな松並木  
 一段と声を落して説く効用  
 はぎれまで上手に生かすママの腕  
 コマーシャルをないに効きめおますのか  
 万能薬飲んで事足る気の病い  
 仏壇を背にかみなり落される  
 舶来を塗つても同じ妻の顔  
 一杯の酒で溶けだすわだかまり  
 毒が薬という効用もありまして  
 効用を信じないから腹立たす  
 効用は問わず仁丹持っている  
 早起きをしてさわやかな顔に会い  
 貧乏の効用工夫の知恵が出来  
 役に立つ男に恩を売っておく  
 トドメさす言葉上手に使わねば  
 美しくなる効用もあり恋をせん

酔々 憲祐 萬的 庸佑 小路 柳宏子 文秋 一三夫 満津子 鎮彦 新之助 恭太 古方 柳選 史好 みずほ みずほ 雀踊子 鎮彦 鬼遊

54年度本社旬会全出席者(11月現在)  
 菊沢小松園・桑原喜風・戸田古方・島居  
 百酒・若柳潮花・山本規不風・不二田一  
 三夫・桶高薫風・板尾岳人・津守柳伸・  
 香川酔々・金井文秋・藤田頂留子・神谷  
 凡九郎・河井庸佑・高杉鬼遊・小谷葉子  
 ・村田瓢太・竹中綾女・西川誓二・江口  
 度・兎島与呂志(与呂志報)

冗談の効用堅い座がなごみ  
効き目あつたらしい電話の声弾む  
待ち歩一枚が今頃効用あらわした  
老人のただ一言が効いた席  
ガム噛むと樂觀的になつてくる  
お役所用という肩書のある名刺  
微笑の効用明日の希望薄く  
衛星の効用火星の像送る

兼題「黒板」

香川 醉々 選

黒板の裏にも教師の顔がある  
黒板が真白教師の目が燃える  
おでんやの黒板の品高が知れ  
黒板にかいて脱線しはじめる  
先生が来る黒板を誰が消す  
黒板へ原子爆弾は戻れない  
黒板の文字サヤがては消されよう  
修身と書く黒板がふと欲しい  
黒板は生徒の方がうまい文字  
蟬時雨黒板の字が滲み出し  
黒板の似顔絵先生すうっと消し  
黒板の通りに笑はる妻の留守  
黒板へ生徒の笑はるおかえる  
黒板に文字が馴染まぬ新教諭  
黒板の会話が渴し共稼ぎ  
巢立つ日の黒板にある処生訓  
黒板のカラ出張が暴かれる  
黒板の二日で消えた事故死  
黒板はノート借りたと知っている  
黒板に睨まれているカンニング  
黒板に書くだけの役電話番

恭 太 晴 美 瓢 太 与 呂 志 柳 宏 志 柳 宏 子 幸 太郎 綾 女 枯 梢 白 李 夢 醉 古 方 曲 ん 手 新 之 助 凡 九 郎 登 美 也 一 三 天 三 天 雅 風 新 之 助 紫 香 あ い き 幸 恭 太 小 雅 子 小 路 弘 生 道 子 文 秋

黒板に稚ない恋を嗜まれ  
菊活けて今日は黒板晴れがまし  
黒板の文字も師走を走つとり  
字にならぬ心知つてる伝言板  
黒板へ漫画のうまい子が一人  
きまよは笑顔で黒板みてる養老院  
黒板へ苛立つ先生の字が乱れ  
学級委員先ず先生の顔を消す  
黒板のグラフが死活握つてる  
黒板を拭くと書きたくなくなつて  
大統領死んだと書いてある黒板  
黒板に一字を書いて話し出し  
黒板はまっ黒のどかな駐在所  
黒板に数学教師の荒い文字  
廃校の黒板へ書くさよなら  
二十四の瞳黒板曇らせす  
巧い字を黒板拭きで真似てみる  
裁判所黒板いつも寒々と  
黒板に人間模様満巻を巻く

兼題「逆コース」

阿 萬 萬 的 選

史 好 英 子 鎮 彦 柳 宏 子 千 代 三 桐 下 柳 宏 子 憲 祐 庸 佑 小 松 園 岳 人 紫 香 萬 的 桐 下 萬 的 洋 敏 翠 光 弘 生 吸 江 醉 々 静 馬 曲 ん 手 幸 静 馬 枯 梢 栗 好 郎 凡 九 郎 規 不 風

逆コースの人生又六悔いも無し  
逆コース流して石焼売切れる  
逆コースの人生だつた銀杏散る  
慰勞宴社長の酌は逆コース  
逆コースへ避けたつもりがパーで遭い  
人間宣言天皇だんだん雲に乗る  
逆コースをとって又会う小京都  
逆コース考えている負けている  
一步一步みな逆コースかも知れぬ  
子が生れ結婚式を許される

小 松 園 涼 一 形 水 史 好 紫 香 千 万 子 晴 美 勝 美 桐 下 万 彩 郎 千 代 三 与 呂 志 千 代 三 恭 太 幸 太 郎

市場没食子・カネ女共著  
傘寿・金婚『夫婦』刊行句会  
記念句集『夫婦』金属会館  
昭和55年3月7日(金)六時から  
柳 話 「夫婦」 中島 生々庵  
謝 選 「傘」 市場 没食子  
兼 題 「針」 若柳 潮花選  
「菜」 大坂 形水選  
席 題 「菜」 菊沢小松園選  
会 費 一題・当日発表・各題三句以内  
主 催 川 柳 塔 社

逆コース女はいつも試される  
老刑事逆のコースに賭けた罫  
紅葉の逆れに合わず逆コース  
逆コースいずれ流れに呑みこまれ  
逆コース団体さんとすれ違い  
二日酔記憶をたどる逆コース  
勝負寺から辿る箕面の晚い秋  
逆コース歩いて世間の裏が見え  
妻になる女に出会えた逆コース  
昼食の都合でできる逆コース  
逆コース歩き見つけたいい飲み屋  
ひと様の善意が邪魔な逆コース  
暇な夜は逆コースから引く屋台  
子を探す十日戎の逆コース  
秋の陽の落ちる速さを逆コース  
逆コースも同じ出口の菊人形

晩学へ社長いそむ逆コース

逆コース識者はだんまりきめたまま

逆コース土産は買わぬことにする

逆コースへ意地が炎となるピエロ

逆コースだんだん凡人を悟らされ

忘れたい世界があった逆コース

晩学の不利を承知の逆コース

逆コース本音がちよっぴり顔覗く

逆コース女が知恵をつけている

逆コースきれいな死にざま考える

逆コース紅葉の旅の湯にひとり

据え置きの家賃で雨漏りほっとかれ  
小遣いは据え置きという妻の知恵  
昇給は据え置き天中殺だろ

百酒

洋敏

酔々

寿子

水客

雀踊子

晴美

与呂志

潮花

雀踊子

萬的

兼題「据え置き」 川村好郎選

夢酔  
粘梢  
酔々

窓際に席をうつして据え置かれ

生き字引などと総務に据え置かれ

議員報酬だけは据え置かない赤字

ささやかな利子を据え置く母と住む

政変を見越して値上げ据え置く気

据え置いて様子見てから泣き落し

据え置いた燈籠庭を落ち着かせ

何時までの据え置き借りに行つたまま

据え置いた水が寝ている冬の湖

据え置きの石臼土間にある旧家

当にした配当不況へ据え置かれ

反抗を胸にしまつたまま育ち

据え置きという恐妻で酒も好き

薬にも毒にもならず庶務のまま

囑託だから据え置きに逆らえず

据え置いて生命の軽さだけ残り

吸江

幸太郎

恭太

水客

あいき

生々庵

綾女

弥生

憲祐

百酒

水客

千代三

柳宏子

翠公

大茂津

赤い花みるとほしがる手長猿

兼題「並木」 伊藤 定子選

並木道私的なかの地図になし

珈琲が飲みたくなつた並木道

うしろからの足におびえる並木道

旅先の並木が泣いていた緑

兼題「虫」 野村太茂津選

埋めたてる噂へ動かぬ虫の意地

虫をきく秋カラフトに父の墓

這うてゆく虫は蹟くことはない

黙らせて虫を聞いている腹の虫

妖精が来そつた夜だ鍵をあけ

据え置いて配当だけを取るゆとり

据え置きのゆとり銀行見逃さず

据え置きも限界値上ほのめかす

据え置きの金庫中味だけが無い

据え置きの値段で老舗の意地を見せ

すえおきも承知定年延びるなら

温情と云う囑託に据え置かれ

据え置きにされても妻は信じきる

身にしみる情借金据え置かれ

据え置きのない人生のまがり角

据え置きの値へビフテキが薄くなる

据え置きの貯金が憎い夜もある

水褌の位置を変えずに亡母と棲む

据え置きにされて炎え出す愛もある

よう辞めもせず据え置きの椅子にいる

(河井庸佑・整理)

文秋

道子

誓二

小松園

みずほ

万彩郎

曲ん手

万里

太茂津

吸江

涼一

千代三

鬼遊

寿子

好郎

八尾市文化祭

市民川柳大会

(右から人・地・天・軸)

席題「忘れる」

コップ酒昔のことは忘れよう

忘れたいことがゆれてるイヤリング

こつちから電話してて忘れてる

忘れてはならない妻の誕生日

兼題「猿」 保木 寿選

ボス猿にそつと耳打ちしていた

真つすくに木から落ちてはならぬ猿

人間が祖先だったと猿が云う

中尾 藻介選

孤舟

育園

形水

藻介

壽選

岳人

千代三

兼題「並木」

並木道私的なかの地図になし

珈琲が飲みたくなつた並木道

うしろからの足におびえる並木道

兼題「虫」

埋めたてる噂へ動かぬ虫の意地

虫をきく秋カラフトに父の墓

兼題「鍵」

黙らせて虫を聞いている腹の虫

伊藤 定子選

猿

藻介

入仙

定子

弥生

雀踊子

武茂雄

大茂津

兼題「空気」

コスモスを憎む空気が少しある

何んにもないが母の空気を味わいに

独房の空気四角いままで居る

幻想と現実の間で動かない空気

兼題「躍動」

資本家の躍動赤坂からつづく

躍動する明日の貌を覗かれる

躍動を終えて火山は眠くなる

糸葉

寿界

白兔

糸葉

香豊

糸葉

糸葉

「堺まつり」協賛

第33回堺市民川柳大会

兼題「渡る」 高杉 鬼遊選

佳 世渡りの手段おどけた面も買う 信治

佳 昨日もつ犬が通った渡り初め 史好

佳 先頭が渡ると落ちつく丸木橋 茂雄

佳 落ちそうな橋を渡ってみたくなる

兼題「礼」 橋高 薫風選

佳 礼述べる時は他人の顔をする 眉水

佳 朝礼にいつも出てくるヒットラー 藻介

佳 八ずみとり札をつくしてぬすみ待つ 秋栄

兼題「観光」 田中桂太樓選

佳 S.Lでつなく素朴な観光地 信治

佳 観光地朝のドラマで作られる みずほ

佳 観光の寺に尼僧の身だしなみ たつお

兼題「物置」 岩本雀踊子選

佳 物置へ飽きた人形の柢置く 千尋

佳 物置で母を憎めるだけにくみ 天樹

兼題「証し」 室田 千尋選

佳 いっぱいのカレライスにある証 泰

佳 生年月日がおんなの証しはならぬ 寿界

佳 鮮明に風が写っていた証し 寿界

兼題「包丁」 片山つとむ選

佳 包丁の重さまともにのめりこむ 寿界

佳 包丁で板場のvari読みとられ 宏子

兼題「敬語」 中尾 漢介選

佳 兎器にもなる包丁の置きどころ 植

兼題「敬語」 中尾 漢介選

佳 箸をもつときの敬語が美しい 俊介

佳 サラ金の葉書敬語で速い込み 一二三  
秀 先生が好きで敬語を使わない 史好  
軸 友だちに敬語を使うときもある (八木摩太郎報)

昭和54年度大阪文化祭

第31回川柳大会

(句は右から人・地・天・秀・軸) 安井 久子選

兼題「レンズ」 お向いの窓にレンズがはめてある 白兔

佳 温もりを持たぬレンズの中にある レンズから覗くと鬼は童顔で 岳古

佳 悪の芽をさぐるレンズをみがいとく 久子

兼題「慶び」 竹村 紅蕉選

佳 慶びの酒は嬉しく酌ぎこぼし 小松園

佳 鯛の尾が跳ねて慶び倍にする 孤舟

佳 慶びへ父の退職金が減る 幻四郎

兼題「パカンス」 西田光太郎選

佳 パカンスの少女思ひ切り背伸びする 眉水

佳 パカンスへ若者地球儀を廻す 英比古

佳 パカンスで娘の成長見届ける 幻四郎

佳 昭和一行にパカンスの時間割がない 宮岡 久

兼題「善意」 高橋 操子選

佳 少し金貯めて善意を軽んじる 水保

佳 にごやかな顔に善意の住んでいる 露情

佳 ダイヤルを廻す指先まで善意 定金冬二

佳 年の瀬を善意の温い風も吹く 操子

兼題「時事雑詠」 広瀬 反省選

佳 どうかべんの宣言スカウト眠れず 静風

佳 煉炭の孔からのぞく石油危機 幻四郎

貧政へ僕はあくまで浮動票 梶 堯  
難民の中の子供のいい笑顔 菊沢小松園  
負けてなお讃岐うどんのねばり腰 反省

兼題「御堂筋」 西村 芳川選

佳 離婚成立一気には渡る御堂筋 美巳代

佳 一日の戦さをいやす御堂筋 寿界

佳 地下を出て秋が黄色い御堂筋 垣根

佳 イデオロギー忘れて御堂筋を行く 三川美佐

兼題「ベット」 日曜画家大阪創る御堂筋 芳川

佳 末っ子の案でベットの名が決まり 米沢 俊夫選

佳 愛されぬベット首輪がきつくなる 邦晴

佳 無医村もあるベットの脈を見る 豊 堯

佳 ベット抱くポーズベットも心得る 豊 堯

佳 ハイミスにベットの恋は邪魔をされ 広瀬反省

兼題「雲」 前田美巳代選

佳 村の梢の雲がむかしとつながらぬ 俊夫

佳 嬬しようもない十月の白い雲 幻四郎

佳 雲に躓いて男を見失しなう 冬二

佳 胸張れる貧しきさんだ秋の雲 本多清人

兼題「中流」 堀江としを選

佳 中流のくらし質素な妻がいる 操子

佳 中流の家庭いつも両親いてくれる 武助

佳 銀行の口座もつる市場籠 久保田寿界

佳 中流の意識パセリが皿に載る としを

兼題「人気」 西尾 菜選

佳 人気出てサインの文字をくすし出し 正久

佳 人気者の汗は冷汗かも知れぬ 弘生

佳 スキャンダル少し流しているのも人気 光 穂

佳 ライバルの人気を少し甘く見る 片岡湖風

佳 人気者少し遅れる癖がつき 菜

佳 ▼講演はスライドを使用して面白いものでし (西田柳宏子報)

# 老地柳堂

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

## 川柳わかやま

津田 与史報

花開くよこび苦勞消して行く  
 よろこびを手にするまでの長い道  
 男一匹好きで危い橋渡る  
 楢山へ橋遠くなる近くなる  
 橋わたしてしたたかな皮算用  
 昇進の橋なら遮二無二駆けてみる  
 断絶の父子へ掛け橋となる母で  
 城下町橋それぞれにある歴史  
 手をとれば愛と限らぬ丸木橋  
 吊橋のゆれが手と手を握らせる  
 逢うための橋が二人に揺れすぎる  
 それからの想い深める海の彩  
 それからを読んだ布石が皆はずれ  
 それからを貴男の胸に聞いてみる  
 それからを一言紫煙に問うてみる  
 それからが昂じた店主の無愛想  
 書店から書店へ退屈捨てにゆく  
 独り歩きを書房へ誘う秋の風  
 実篤のカボチャ書店に湧えている  
 言論の自由書店でひしめいて

紀久子 英子 与史 幸 公子 公しよ 光代 三男 十郎 女 千代 勇太 正博 頼次 和子 太茂津 武雄 寿子 佐代子

## いずも川柳会

高見

鐘堂報

紅茸の誰れも触れないままくずれ  
 幸運を開く自画像かも知れず  
 赤トンボ母の背中にうたがある  
 出張費浮かせる役も幹事役  
 出張が臭いと呪む妻の勤  
 古代史の謎シルクロードの道開く  
 おみくじの程に開運向いて来ず  
 展望が自慢新居の窓を開け  
 気むづかに片言子の電話  
 出張の父に片言子の電話  
 立話肩で聞いている赤トンボ  
 川面にも縄張りある鬼ヤンマ  
 お役所を動かす油に空出張  
 出張の靴ふくらむ旅の味  
 松茸がここよと木の葉盛り上げる  
 人間を信じ茸山縄を張る  
 家建てる手抜きも棟梁教えこみ  
 出張という名目のゴルフ焼酎  
 松茸は一本ともかく呑むとする  
 川柳たけはら 森井 善居報

代仕男 叮紅 虎秋 水煙 みのる 寿美子 可保留 独仙 夢醉 秀子 九二老 草丘 孝太郎 多賀子 登美也 耕草 河南 通児 緑之助 静水 房子 笑子 こうじ 蘭幸 不朽 菁居 鬼焼 貞子

種火交換猥がうたた寝してる間に  
 あたためてあたためて悦び口に  
 昼寝からさめればトマト熟れている  
 これからの期待貧者の夢なるか  
 曲り角亡父の足跡確と見る  
 メチャメチャに酔ったと夫電話くれ  
 人が良いだけで渡れぬ橋である  
 不快指数の夜を眠らせず  
 例え指話その夜を眠らせず  
 少年を食う野ばなしの販売機  
 も一つの野心へ星が赤く燃え  
 むらくも句会 藤井 明朗報  
 思い出をかきけすように鯉がはね  
 相性は耐えて手を取る夫婦像  
 うますぎる話へ欲が乗ってくる  
 より添うて思い出語る古写真  
 思い出は遠くふる里遠くなり  
 三味線の粋な小唄の昼下り  
 年月は過去の思い出消しに来る  
 走馬燈となる思い出は亡夫のこと  
 思い出をたたみ独りの灯に生きる  
 思い出に母の姿を画布にかく  
 宴会の唄を引き出す口三味線  
 苦勞した思い出笑える歳になり  
 オースケール川柳会 大坂 形水報  
 受付の花が静かに迎えてる  
 受付で先に用件聞かれてる  
 沈む陽に二つの影はゆれてゆき  
 受付で名刺またまたストップし  
 受付の顔が社風にみえてくる  
 受付で離婚届がまだ迷い

かつこ 秀夫 寛子 鈍舟 節夫 敬子 一路 英詩 かつ子 百合 のぼら 緑之助 峰雪 はじめ 富子 百代 孝華 秀子 文子 みどり 明朗 形水報 みどり 鱗 秀川 千夢 博泉 光夫



古時計思ひ出だけを語り出し  
北満の思ひ出遙か北斗星  
思ひ出は愉快な友の歌の声  
忘れたい思ひ出想い隅に生く  
赤ふくき縫い上げた日の思ひ出よ  
思ひ出の校舎工場に売られて居

川柳ささやま  
河原みの報  
テクニクの本音を吐かずツボを知り  
政治家の本音一票はしいだけ  
反骨の本音は別の仮面着る  
遺産分け次第次第に本音出し  
女房の出しやばり牛を売り損ね  
出しやばりがいて葬式が無事に済み  
出しやばりが来ぬ間に相談まとめられ  
出しやばりがいて司会者を手こずらせ  
損ですと本音伏せてる大福帖  
祖母となる手で岩田帯めてやり  
はら巻に捨てたつもりのバーのつけ  
腹巻は嘘と宝の隠し場所  
新人は遠慮しいしい王手飛車  
新人と思えぬ字句の運び方  
部員とは名ばかり新人球拾い

御前 満春 碧水 秋女 みやび 弘朗  
ひるか平 宗珠 一好 素水 可住  
とみ子 越山 百合子 孝  
貞子 法齋 文平 よしの 掬水  
大輪 勇太 富子 英子 鉄晴 冬花 三千代 公子

母子家庭子の作文に父がある  
作文で小鳥や蝶と友になり  
正直な作文夫婦を矯正する  
作文は知らない父の朝帰り  
父の恥母は繕う糸を持ち  
疑わぬ母のきれいな瞳に恥じる  
はずかしがつてきれいな嘘をつく  
乗車して財布忘れた恥かき  
恥知らぬ汚職の顔が悲しくて  
政治屋の恥に比べや小さい恥  
制限速度を恥じぬきれいな免許証  
老い故の恥にも耐えている長寿

川柳後染(岡山県) 井上柳五郎報  
増税が痛い先手の秋の陣  
持駒を先手取られてきき直し  
くじかれた出ばな自分を失わない  
奥の手がもつ出る頃に打つ先手  
善人がいつも譲っている先手  
世話好きで世間を広く生きている  
迷惑な話を世話好きもつてくる  
世話好きの耳にはさんだいい話  
買って出る世話好き時々へまをやり  
世話好きが女房の愚痴を聞き流し  
いまわしい記憶の底にある人生  
人生は苦しい記憶だけ残り  
核心にふれると記憶だけ逃げ  
忘れたい記憶が眠れぬ夜にする  
病院で隠居ばかりが長話  
趣味一つ隠居をささえる花鋏  
若隠居孫の子守は嫌がられ

式 道子 善太 十郎 とよ子 幸 与呂志 希久志 千寿子 武雄 弘生 梁太 秋彦 夏彦 たけ志 草風 哲郎 住治 昌吾 佐加恵 柳五郎 胡風 博友 恒洋 元一  
駒つなぎ句会 里 小路報

母さんの機嫌で変わるお膳立  
ご機嫌さんと肩叩けば人嫌い  
顔色で妻は機嫌をよく勘き  
茶柱も今朝氣に要らぬ父の顔  
機嫌よい赤ちゃん天使の顔になる  
奥さんが渡日してから打ち始め  
カメラアイ女心を追いつつけ  
胃カメラに安堵食欲増してくる  
胃カメラを吞み込む結果の恐ろしさ  
百万ドル夜景盗んで来たカメラ  
写真屋のカメラに鶴と亀になる  
銃殺と同じにモデル囲まれる  
嫁さんを貸してもカメラ貸すでない  
若い頃の夢はやっぱり夢のまま  
何も知らない強さがあつた若い頃

美乙女 誓二 雅風 柳宏子 雀踊子 千代三 凡九郎 育園 勝美 醉々 桐下 薰風 鬼遊 鎮彦

佳句地10選 (前月号から) 谷垣史好選

太陽を背に勝つことを考える 葉土人  
生活もそんな調子のノーハット 聖地  
よく出来た積木ゆすつて見る他人 憲 祐  
老の背に逆らい切れぬものがあり 柳宏子  
母になる決意で何もこわくない 寛 子  
人工の滝のしぶきにある疲れ 雀踊子  
父の死へこれから男の顔になり 可 住  
靴音の軽さに人の幸を聞く 田鶴子  
生涯を軽い命のまま生きる 君子  
田舎にも麦笛を吹く麦がない 大鷹



口説かれて義理には勝てず母は泣き  
親切にすれば男は口説き出し  
筋道を立てた口説きに丸められ  
口説くにも時間をかける年の功  
口説かれて見度いのは逃げて行き  
口説くにも金と度胸は持って居ず  
口説かれた娘が人生花でした  
口説かれた娘が母にだけ意見聞き  
口説き様丸く納めて高砂や  
口説き様丸く納めて高砂や  
かたい娘も口説き上手に詳しい  
さわやかに口説く音頭に足軽く  
口説くコツ二人が語るバアの隅  
口説かれて返事をしばし差し控え  
口説きたい下心あつて四帖半

虹川柳倶楽部  
新岡回天子報  
郵便夫城の石段息をさきり  
なんとまあお賑やかなる茸狩り  
増税が好きもいるらし総選挙  
官賊を賭けて肥後路の選挙戦  
煽てをば待つて候補に出陣し  
愛犬に愚痴をきかせて少し楽  
畦々に華やか見せて彼岸花  
お遍路もバイクで走る時代相  
すず虫の声も老いて秋深し  
明日と云う文字で慰められて生き  
はずれたくじ金になる道一から揃えてい

勝山双葉川柳会  
河野 君子報  
勉強嫌い親に似たとは子に云えず  
孫にだけは嫌われまいと気を使い  
すすきの穂ゆらりゆらりとわれに似て  
旅のなさけ一杯もらつて帰つて来る

彩女 雪海 北海 三石 梨花 万里歩 拝山 蒼生 草海 紅溪 黄塵 秀山 虹宵 晚舟

嫌いと云つてすねてみたい愛もある  
嫌いな人と行かねばならぬ道もある  
時過ぎて鶏頭の赤うつるげに  
曼珠沙華燃ゆる思いが胸にあり  
嫌いとも云えずにお茶で流し込む  
疑えば嫌いになると目をつむり  
秋なすを皿にひとりの驕りかな

東大阪川柳同好会 齋藤三十四報  
四十五度明治は礼をくささない  
手こずつた子を変り種とあきらめる  
よい方の変わり種なり御注目  
誰の血を受けたか一人変り種  
昔の角度母は苦勞の過去を持ち  
手習いになつた頭と知る六十  
更生になぶる心へ鞭を打つ  
回転がにぶり二度読み三度読み  
かけ声位の尻押ならしよう  
職安で足のにぶりは伏せておく  
鼻先のスッポン鍋で油じみ  
鼻血の責任もスッポン持たされる  
スッポンのように悪女がしがみつく  
逸話にも味が豊かな変り種  
旗色を読む尻押もいるだろう  
年輪が顔に出ているクラス会  
九目をおかせて見る白の石  
角度を変えたら意見が合つて来た  
年輪へ夫婦の愛が深くなる

どんぐり川柳会 谷垣 史好報  
深い溝知らぬ他人のさしでぐち  
深刻なシーンで擬音部も静か  
人並みの生活にきつい市民税

千里 田鶴子 いくの 千重子 智子 節子 君子 三十四 綾女 金福 良京 喜風 弘生 喜洗 弥山人 弥度 信治 喜一郎 恒明 慶三 文秋 雀踊子 千代子 利吉 湖風 憲祐 千代三 鬼遊

人並みの暮し子があり孫があり  
天高く物十台もふんばつて  
人並みの男で七つ癖があり  
深刻な話 男は弱くなる  
ムードに弱い女の財布を先ず狙い  
ふんばつても雀は案山子を恐れない  
すこうしは匂う他人でないムード  
ふんばりが消えゆく父の背が丸い  
人並みの欲が出て来る子が生まれ  
人並みに地球は丸いものと知り  
ふんばつた男の背はピンとたつ  
人並みのくらしへ齢を取り過ぎた  
ねむの木の子らもふんばる負けられぬ

村田飄太著  
川柳生活25年『紅華』12月初旬発行  
記念句集  
序文 川村好郎 美装箱入り  
編集 不二田二三夫 千四下とも  
昭和55年6月6日(金)六時  
『紅華』刊行記念句会会場金属会館

柳話 「紅」 川村好郎  
謝選 「サラリーマン」 笠原吸江選  
兼題 「手品」 西田柳宏子選  
「孫」 菊沢小松園選  
席題 (一題・当日発表)・各題三句  
会費 千円(句集呈)

主催 川柳塔社  
▼句集お申し込みは本社または〒570大阪府守口市金下町二の二〇 村田飄太あて

# 本社十二月忘年句会

日時 十二月七日(金) 午後六時  
会場 金 属 会 館

南区 鰻谷 東之町 10 番地  
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ  
電話 271-3935 番

柳 話

野村太茂津  
(今月の出題・香川酔)

兼題 「灯」 「夜警」 「口下手」 「商店街」

神谷凡九郎 選  
西田柳宏子 選  
黒川紫香 選  
大坂形水 選

会 席 兼 費 題 二 一 題 当日発表

★投句だけの方は切手百円封入

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鰻谷中之町20

川 柳 塔 社

1月の兼題 喜 集 金  
祈 梅

12月の常任理事会は3日(月)

1月休会・2月は4日(月)

占部晴美句集「起伏」が昭和五十四年十月二十日発行になった。序を「普段著の持つ真実」三條東洋樹氏が書き、跋を新葉美野路、小松原爽介両氏が記し、それぞれ著者の横顔に耽れておられる。晴美さんには弓削の西日本川柳大会での秀句  
仰ぐ陽へもうあらそわぬことに決め  
が川柳公園に句碑となつてゐる。その字を見ても、句集所載の色紙の筆跡を見ても真面目で風格がある。なおざりではない修練が偲ばれるのである。  
小鳩そつと手放す如く子を送り  
けしの花ひらくにも似て子の目覚め  
などの初心時代の作品から、  
美しい小宮をためて老いて行く  
見送つて暫し気付かぬ小糠雨  
の近來の句に至るまで、優しい繊細な母の心、女心に触れたものに佳品がある。  
今日からは寡婦という名の馬車うまで  
の厳しい生活を経て句境も深まつたのである。(薫)

## 募 集

### 二月号発表表 (12月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選  
水煙抄(10句) 川村 好郎 選  
愛染帖(3句) 橘高 薫風 選  
課題吟(各題5句以内)

「福豆」 藤田 軒太楼 選  
「省エネ」 仲 どんたく 選  
「相性」 辻 白溪子 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

### 三月号発表表 (1月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選  
水煙抄(10句) 川村 好郎 選  
愛染帖(3句) 橘高 薫風 選  
課題吟(各題5句以内)

「服飾」 榎 みどり 選  
「保険」 藤村 メ 女 選  
「しつけ糸」 高橋 操子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

今月の常任理事会は3日5時から

定価 四百円(送料29円)

半年分 二千五百円(送料共)  
一年分 四千八百円(送料共)

昭和五十四年十二月二十五日印刷  
昭和五十四年十二月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地  
編集兼 中島 蓬太郎  
発行人  
印刷所 藤原 童心社

〒542 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地  
発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一―三三九八五番  
振替口座 大阪・三三三六八番  
普通預金口座番号・一〇二七八三

・ペンペン草・

十大ニュース

- ★さて、本年の川柳塔社の十大ニュースとなれば、あなたなら何を選びますか。はくのえらんだ十大ニュースをご披露すると、
- ①中島生々庵本社主幹、日川協理事長に就任。
  - ②川柳全集⑨「麻生路郎」橋高薫風編、選定図書となる。
  - ③若本多久志句文集「続・老いの坂」刊行記念句会。路郎忌を兼ね、番傘川柳本

# カック (脚氣) 肉体疲労時の ビタミンB<sub>1</sub>補給に アリナミン<sup>®</sup>A

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも

☆アリナミンA 25ミリ錠のほかに5ミリ錠



社と金泉萬葉氏ほか川柳塔社の選者交流。

- ④川村好郎喜寿記念川柳句集「遍歴」出版。
- ⑤児島与呂志著「地下鉄」刊行記念句会。限定五百部。一か月で売り切れの快事。
- ⑥麻生路郎句碑建立三十周年記念西日本川柳大会(弓削へ大挙出席)
- ⑦第三回全日本川柳大会、大阪で開催。
- ⑧「新緑・四国の旅吟行」

▼菓子コーナー

- ①スキー場だよりがボツボツではじめました。
- ②小学生の頃スキーで学校に通った事があり、手袋をはめても指先がジンと冷たく、両手を口の前に合わせてハァハァ息を吹きかけながらストックを握ったものです。
- ③先日、新しい家が建つ一角で、木片や大鋸屑の焚火が燃えていました。顔をぼてぼてとくるりと後ろを向いて背を温め、体じゅう焚火の匂に包まれて子供頃の頃が懐かしく思い出されました。

と「阿波踊り川柳大会」吟行。

- ⑨直原玉青先生の「襖絵鑑賞句会」淡路・千福寺へ吟行。
  - ⑩路郎句碑探訪(上田翠光居)
- あなたならどう組み直しますか。
- 私の十大ニュース
- ★あなたもご自分の十大ニュースをえらんでみたらいかがですか。
  - ①児島与呂志著・川柳句集「地下鉄」編集。
  - ②市場没食子・市場カネ女共著・傘寿・金婚記念句集「夫婦」編集。
  - ③村田瓢太著・川柳生活二十五年記念句集「紅華」編集。一みなそれぞれに思い出がある。
  - ④活版印刷から写植印刷に変わり、編集担当者としての人知れぬ苦心。
  - ⑤本社常任理事会全出席(創立らしい十五年間)
  - ⑥本社句会創立十五周年に一回欠席。
  - ⑦勝山双葉川柳会の名付け親。女性ばかりの異色句会。
  - ⑧糖尿病(軽症)はじめて病名を持つことになる。
  - ⑨減食中。人並みの食生活

- ⑩階段を敵とする。ざっとこんなものです。夏らしい鯉どんぶりを一度も食べていないことは十大ニュースの第一位に推したから「食欲」を差し引けばなにか残るのかさびびしいことである。
- ★娯楽の十大ニュースともなれば「国際児童年協賛・国技大賞決定戦」の招待券を買ったので校正の合いまをぬって見に行った。勝負は花相撲だから面白くなかったが、相撲漫才という初

たのしさひろがるお買物

阪急

切(しよつきり)や、朝夕をモデルにした床山(大いちょう)の手さばき、四つ位の太鼓の打ち方などを第一位に推した。

郵便料金値上げ

★十大ニュースの花形、増税選挙に自民党が敗れても55年度は値上げラッシュになるだろう。その中で郵便料金の値上げが一番こたえる。年賀ハガキが35円以上にならば、この際新年広告に切りかえるつもりである。

★よい年をお迎えください(不二田一三夫)



わたしたちには、  
やっぱり白が、  
口に合うみたい。

流行は白。  
街のワイン。

サントリーワイン  
**デリカ**

720ml(白・ロゼ・赤) **600円**  
製造・販売 サントリー株式会社 標準的な小売価格



タッチでえらべば  
やっぱりサコム

**サントリー電子式計算機**  
**サコム**  
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円  
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き  
16ケタ2メモリ高級品

**SANYO** 三洋電機株式会社